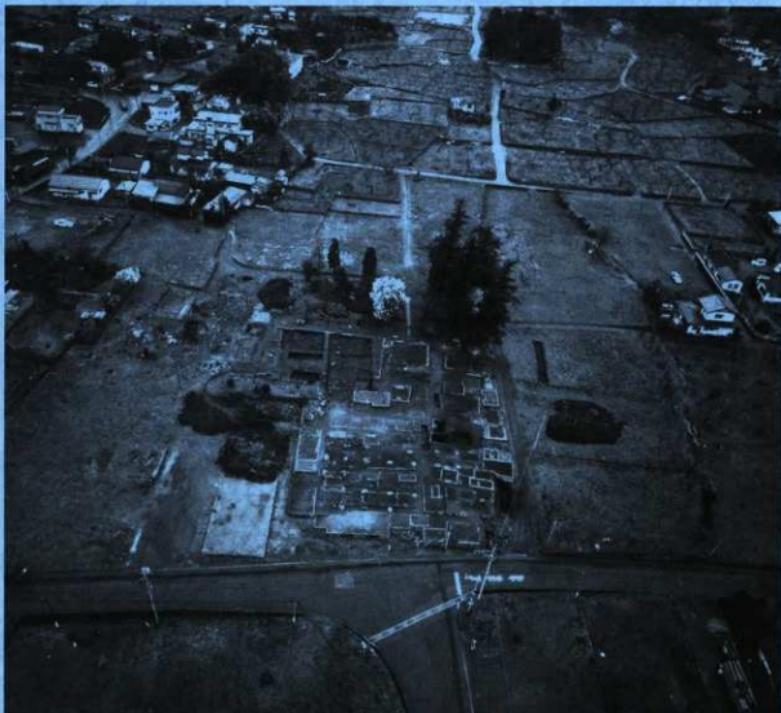


国指定史跡

甲斐国分寺跡

- 金堂跡確認調査の概要報告書 -



伽藍中心部（北から）

2012

笛吹市教育委員会

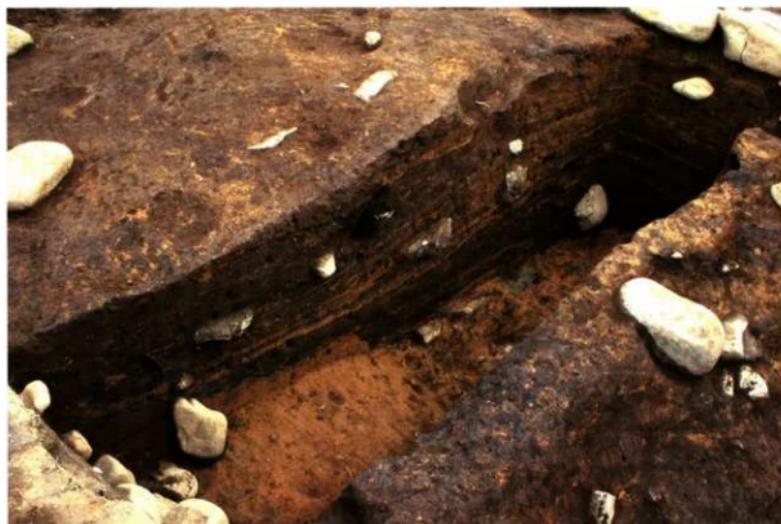


1 伽藍中心部空中写真（平成 21 年度・合成写真）

カラー図版 2



2 金堂南東石敷・地覆石・基壇検出状況（北から）



3 金堂跡基壇断ち割り状況



4 金堂北側石敷・地覆石・基壇検出状況（北から）



5 磨石検出状況（南側）



6 磨石検出状況（北側）



7 甲州金出土状況



8 金堂跡出土甲州金

カラー図版4



9 金堂跡東側基壇・石列等検出状況（東より）



10 金堂南西石敷・地覆石・基壇検出状況（南より）

序

甲斐国分寺跡は笛吹市一宮町国分にあります。甲斐国分寺跡は大正 11 年に国の史跡に指定され、旧一宮町の時代から発掘調査を行い、寺域の範囲などの確認をしてきました。また、史跡範囲内の土地の買収も進み、金堂跡や講堂跡に続いていた現在の国分寺も近隣に移転していただきました。ようやく史跡整備の準備も整ってきたので、史跡整備のための伽藍の建物の遺構確認調査を実施することになりました。まず、平成 19 年度に講堂跡の礎石の清掃を行い、平成 20 年度から再び発掘調査を開始しました。発掘調査は、手始めに国分寺の中心の建物の一つである金堂跡の解明を目指して実施しました。結果、全国の国分寺と比べてみても規模が大きく、金堂の正面と背後にはきれいに石が敷き詰められ、相当立派な建物が想定されます。本書は、平成 20・21 年度に調査した金堂跡についての概要報告書です。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行にいたるまでご協力・ご助言を諸機関ならびに様々な方々に厚く御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

笛吹市教育委員会
教育長 山田武人

例 言

1. 本書は、山梨県笛吹市一宮町国分 425-1 外に所在する国指定史跡甲斐国分寺跡（金堂跡）の遺構確認調査の概要報告書である。
2. 調査は、文化庁・山梨県の補助金を受け、笛吹市教育委員会が主体となって実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

【甲斐国分寺跡・甲斐国分尼寺跡保存整備専門委員会】

会 長 清 重 俊 元（山梨県文化財保護審議会会長）

副会長 谷 口 一 夫（笛吹市文化財保護審議会会長）

委 員

須 田 勉（国土館大学文学部教授）

佐 藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授）

大 岸 清 陽（山梨大学教育学部准教授）

十 美 駿 武（山梨学院大学教授）

畠 野 純 夫（財団法人文化財建造物保存技術協会参与）

田 烂 貞 寿（千葉大学名誉教授）

内 田 忠 利（国分区長）

鷹 野 和 男（東原区長）

芦 田 宗 興（国分寺代表）

参 与

八巻与志夫（山梨県教育庁学術文化財課課長補佐）

今 福 利 恵（山梨県教育庁学術文化財課リーダー）

宮 里 学（山梨県教育庁学術文化財課）

小 野 正 文（山梨県埋蔵文化財センター所長）

出 月 洋 文（山梨県埋蔵文化財センター課長）

長 沢 宏 昌（笛吹市文化財保存整備委員会会長）

事務局

中 山 孝 仁（笛吹市教育委員会文化財課課長）

小 潟 忠 秋（笛吹市教育委員会文化財課リーダー）

伊 藤 修 二（笛吹市教育委員会文化財課リーダー）

瀬 田 正 明（笛吹市教育委員会文化財課）

望 月 和 幸（笛吹市教育委員会文化財課）

調査担当

伊 藤 修 二（笛吹市教育委員会文化財課リーダー）

大 木 丈 夫（笛吹市教育委員会文化財課臨時職員）

（平成 22 年 3 月現在）

4. 発掘調査は平成 20 年 12 月 8 日～平成 21 年 4 月 30 日および平成 21 年 12 月 7 日～平成 22 年 4 月 30 日まで実施した。

5. 本書中で示した図や理解はあくまで現段階のものであり、本報告時に変更される可能性がある。

6. 出土遺物、記録図面は笛吹市教育委員会で保管している。

7. 掘図中の座標値は、世界測地系の座標で示した。

8. 遺構・遺物の図版の縮尺は原則として各図ごとに示している。

9. 遺構図版中の ■ は基壇の範囲、 ▲ は溝跡を示す。

10. 遺物図版の断面の ■ は須恵器、 ▲ は灰釉陶器を表す。 ▨ は黒色処理を示す。

11. 発掘調査及び整理作業参加者は次のとおりである。

- 荒川公子 荒川奈津江 櫻原千代子 小川切健吾 神沢時子 橋田ぎん子 鈴木幸子 鈴木智恵美
 志茂睦 神宮司きよみ 高野眞寿美 竹越妙子 土屋美保子 天川睦美 中込耕 西山和子 野沢きみ江
 花村玲子 藤原さつき 藤巻淑子 保坂洋 馬渕泰造 馬渕松子 矢崎睦美 吉岡和恵 渡辺利江
 12 発掘調査から本書作成にいたるまで、様々な方々から貴重なご助言、ご協力を賜った。記して感謝申し上げたい。
 飯島泉 石神孝子 海老沼真治 櫻原功一 香名貴彦 小林健二 小林広和 坂本美大 佐々木満 末木健
 高野玄明 田代孝 田中広明 中山誠二 新津健 野代恵子 野代幸和 畑大介 林部均 平川南 平野修
 幸山優 保坂和博 保坂康大 室伏徹 吉岡弘樹 宮沢公雄 望月秀和 山内昭二
 文化庁（財）山梨文化財研究所 山梨県教育庁教育委員会学術文化財課 山梨県埋蔵文化財センター 山梨
 県立考古博物館 山梨県立博物館 渥之奥金山博物館
 13 本書の編集・執筆は大木丈夫が行った。

目 次

目次

序

例言

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 今日までの調査	1
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査概要	5
第1節 遺構	5
第2節 遺物	15
第4章 調査の成果と課題	17
写真図版	
抄録	

カラー図版目次

- 伽藍中心部空中写真（平成21年度・合成写真）
- 金堂南東石敷・地覆石・基壇検出状況（北から）
- 金堂跡基壇断ち割り状況
- 金堂北側石敷・地覆・基壇石検出状況（北から）
- 礎石検出状況（南側）
- 礎石検出状況（北側）
- 甲州金出土状況
- 金堂跡出土甲州金
- 金堂跡東側基壇・石列等検出状況（東より）
- 金堂南西石敷・地覆石・基壇検出状況（南より）

挿図目次

- 甲斐国分寺跡伽藍復元想定図
- 甲斐国分寺跡位置図（1:25,000）
- 甲斐国分寺跡・甲斐国分尼寺跡位置図
- 周辺遺跡分布図（1:10,000）
- 金堂跡トレチ設定図及び
 中心伽藍想定図
- 金堂跡遺構配置図
- 金堂正面トレチ・南東トレチ平面図・
 土層断面図
- 金堂南北トレチ平面図・土層断面図

第9図	金堂北東及び中央東トレンチ平面図・ 土層断面図···	12	金堂跡南西トレンチ調査風景
第10図	金堂東トレンチ及び金堂北東隅トレンチ 平面図・土層断面図···	14	金堂南西石敷（北東から）
第11図	西回廊トレンチ平面図・土層断面図···	15	坏出土状況
第12図	軒丸瓦実測図(1)···	23	金堂東トレンチ（北）検出状況
第13図	軒丸瓦実測図(2)···	24	瓦出土状況
第14図	軒平瓦実測図(1)···	25	石製鏡盤
第15図	軒平瓦実測図(2)···	26	写真図版2
第16図	丸瓦実測図···	27	薺師経石等
第17図	平瓦実測図···	28	墨書き器赤外線写真
第18図	道具瓦・埠尖測図···	29	出土瓦 1~12
第19図	埠尖測図···	30	写真図版3
第20図	出土土器実測図(1)···	31	出土瓦 13~29
第21図	出土上器尖測図(2)···	32	写真図版4
第22図	出土土器実測図(3)···	33	出土瓦 30~43
第23図	出土土器実測図(4)···	34	写真図版5
第24図	出土土器実測図(5)···	35	出土瓦・埠 44~56
第25図	土製品実測図···	36	写真図版6
			出土土器 57~73
			出土土器 74~79
			出土土器 80~88
			出土土器 89~100
			出土土器 101~115
			出土土器 116~127
			出土土器 128~139
			出土土器 140~145（須恵器）
			写真図版7
			出土土器 146~158（須恵器）
			出土土器 159~171（須恵器）
			出土土器 172~179（灰釉陶器）
			土製品 180~184

表目次

第1表	周辺遺跡・覧表···	4
第2表	軒丸瓦觀察表···	19
第3表	軒平瓦觀察表···	19
第4表	丸瓦・平瓦觀察表···	19~20
第5表	道具瓦・埠觀察表···	20
第6表	土器類觀察表···	20~22
第7表	土製品觀察表···	22

写真図版目次

S45 調査金堂正面石敷及び地覆石検出状況···	2
金堂南東トレンチ検出状況···	6
階段跡検出状況···	8
金堂正面階段付近検出状況···	8
一字一石経出土状況···	8
金堂東トレンチ（北）瓦溜り検出状況···	13
西回廊検出状況（北から）···	15
金堂北東隅トレンチ状況···	17
写真図版 1	
金堂正面階段前右敷（南から）	
金堂正面階段前石敷（北から）	

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

甲斐国分寺跡は、大正 11 年 10 月 12 日に東西約 220m、南北約 240m の範囲が国の史跡に指定された。指定面積は約 46,000m²に及ぶ。

昭和に入ると史跡としての甲斐国分寺跡は長い間放置されることになり、史跡内の無断現状変更が重ねて行われた。昭和 45 年になり、農道拡幅の現状変更許可の申請がなされ、それに伴い山梨県教育委員会が主体となって寺域の範囲確認調査を実施した。これが甲斐国分寺跡にとって最初の発掘調査となった。その後、ほぼ 10 年間現状変更の手続きがとられることが無かったため、発掘調査はなされなかった。昭和 55 年に工場新築に伴う現状変更許可の申請がされた。他にも数件の現状変更許可の申請があったため、昭和 56 年から 58 年にかけて、…宮町教育委員会が主体となり発掘調査を行った。この調査で古代の甲斐国分寺にかかる重要な遺構が確認された。さらに、昭和 56 年度に住宅新築の現状変更に伴う発掘調査を契機として、昭和 57・58 年度に「史跡甲斐国分寺跡・甲斐国分尼寺跡保存管理計画」が策定され、「保存管理計画」に基づき、昭和 58 年度から史跡の公有地化を進めている。そして、計画に従って、昭和 59 年から 4 年にわたり寺域の範囲及び遺構の確認を目的とする調査を実施した。

現在存続している国分寺本堂裏の講堂跡と考えられる場所は、寺の檀家の墓地が営まれており、講堂跡の基壇を保存する上で大きな課題となっていた。「保存管理計画」において、墓地の新設や国分寺の増改築に厳しい制限が加えられていることから、近隣に国分寺を移転を検討することも決められていた。そのため、平成 11 年度に国分寺移転用地を取得し、平成 13 年度から移転作業を行った。平成 18 年度に墓地の移転が終り、作業が完了した。

一宮町は、平成の市町村の大合併に伴い、平成 16 年 10 月に石和町、春日居町、御坂町、八代町、境川村と合併し笛吹市となった(のちに芦川村を編入)。土地買取も進み、国分寺の移転が終了したため、平成 18 年度に「甲斐国分寺跡・甲斐国分尼寺跡整備基本構想」が笛吹市教育委員会によって策定された。この基本構想に基づき、平成 19 年度に講堂跡の礎石のクリーニングと測量を行い、平成 20 年度から 3 カ年計画で、中心伽藍地区的遺構確認調査を実施することになった。平成 20 年度から、甲斐国分寺跡の発掘調査を「甲斐国分寺跡・甲斐国分尼寺整備専門委員会」の指導を受けながら、笛吹市教育委員会が主体となって調査を始めた。

第2節 今日までの発掘調査成果

甲斐国分寺跡の発掘調査は、昭和 45 年に山梨県教育委員会が主体となって実施されたのが最初である。このときの調査は、中心伽藍の調査であった。中門跡付近、金堂跡、塔跡、当時回廊と考えられていた場所へトレチを入れた。結果、中門跡付近では、南北約 8.5m の幅で基壇と思われる版塗が見つかっている。金堂跡では、南辺の地盤石と金堂南側に広がる石敷を確認している。さらに、基壇部分にトレチを入れ、版塗の状況を確認している。塔跡においては、心壁を中心に東西トレチを設定し、礎石が基壇上にすえられて根石の上にあることを確認し、塔東側の階段を発見している。東回廊跡と考えられていた場所のトレチでは、幅 2.7m の上植状の遺構や瓦窓を検出している。この地点では土壇状の高まりを確認したことから、回廊跡ではなく、土壇跡と考えるようになった。

次の調査は、昭和 56 年に現状変更許可の申請に伴う緊急調査で、一宮町教育委員会が主体となって実施している。講堂跡の北側の調査で、礎石建物跡 1 棟を検出しており、国分寺伽藍の東西軸と一致していることから僧房跡と推定されている。

また、金堂推定地の東側約 90 ~ 100m の地点を調査し、南北方向の溝を確認している。

翌年にも現状変更許可申請に伴う緊急調査を実施している。昭和 56 年度に調査した場所は講堂北側の一角にあたり、前年度の調査区の東側の調査であった。結果、掘立柱建物跡 1 棟、礎石建物跡 2 棟などを検出している。

昭和 58 年度は、現状変更許可申請に伴う調査を史跡指定範囲の西中央部に地点で行っている。そこでは南北方向の溝跡、礎石の掘方、掘立柱建物跡の柱穴が出土している。さらに、その東側の畑において、伽藍の範囲

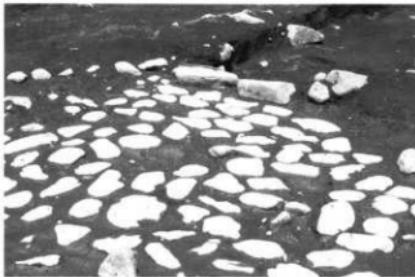
確認調査を実施した。そこでは、幅約6mの基壇状の遺構を確認し、西回廊跡であると推定している。

昭和59年度から、3カ年計画で「保存管理計画」に基づき、寺域の範囲確認調査を行うこととなり、寺城西側の確定を目的でトレンチを設定した。寺城北西隅のトレンチでは、南北方向と東西方向の溝跡を検出し、国分寺の区画溝と考えられている。南西隅のトレンチでは、礎石の根固め跡やピットを確認しているが、建物跡と断定するにはいたっていない。また、昭和58年の調査で回廊跡を検出した北側の畑にトレンチを設定した。そこでは、回廊跡と別の基壇を検出し、回廊が講堂ではなく、金堂に取り付いているものと推定されるようになり、講堂の西側に別の基壇建物があつたことが想定されている。

昭和60年度の調査では、南門の調査と回廊南西隅の調査を実施している。南門のトレンチでは、3つの礎石跡と南辺の雨落溝、南門の西側に東西方向の溝を確認している。この溝は寺域の南限を示すものと思われる。回廊南西隅のトレンチでは、回廊の雨落の集石を検出し、復元可能な鬼瓦片が出土している。

昭和61年度の調査は、寺域北東隅の確認を目的に実施した。東西方向の北辺溝を検出している。

昭和62年度の調査では、昭和45年の調査の検証をあわせ、遺存のよい塔跡とその周辺にトレンチを設定している。塔の基壇と東西南辺を確認し、東階段を検出している。また、塔の東には、東回廊の内側の日石を検出している。



545 調査金堂正面石敷及び地覆石検出状況

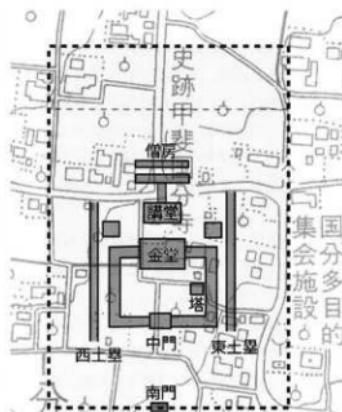
第3節 調査の経過

甲斐国分寺跡を史跡整備する上で、当時重要な建物から確認調査を行うようにとの整備専門委員会からの指導をうけた。平成18年度で現国分寺の移転作業が終了したので、平成20年度より金堂跡の調査を実施することになった。昭和45年の県教委の調査で、金堂跡の南辺の地覆石とその南側にひろがる石敷を確認している。このことから、金堂跡は、現国分寺の薬師堂・本堂・庫裏などの建物のあった場所に存在したと想定されている。

そこで、調査区を設定するに当たって、新国土座標に基づいた杭を10m×10mで設定した。平成20年度の調査は、最初に昭和45年に調査された箇所にトレンチを入れ、このときに確認された遺構を確認する作業からはじめ、金堂跡の東端を確認するためにトレンチを東へ拡張した。次に、金堂の南北の大きさを確認するために、本堂のあった場所の北側にトレンチを設定した。また、金堂の基壇の状況を確認するため、本堂北側のトレンチを南へ一部拡張し、礎石を確認することに努めた。金堂東辺の確定のため、金堂の北東隅と考えられる場所へトレンチを設定した。

平成21年度の調査は、金堂跡の基壇の上のトレンチを拡張し、礎石の原位置を確認する作業から始めた。前年度の調査で金堂の東端を正確にはつかめていなかったため、基壇上のトレンチの東側にも設定した。このトレンチは回廊跡が金堂側面のどこに取り付くのかを確認するのも目的の一つである。

金堂正面に前年度石敷を南北3m確認していたので、金堂跡の南西にトレンチを設定し、石敷の広がり、金堂の南端の把握と金堂正面の階段の西端を検出することを目的に調査した。



第1図 甲、国分寺跡伽藍復元想定図

第2章 遺跡の環境

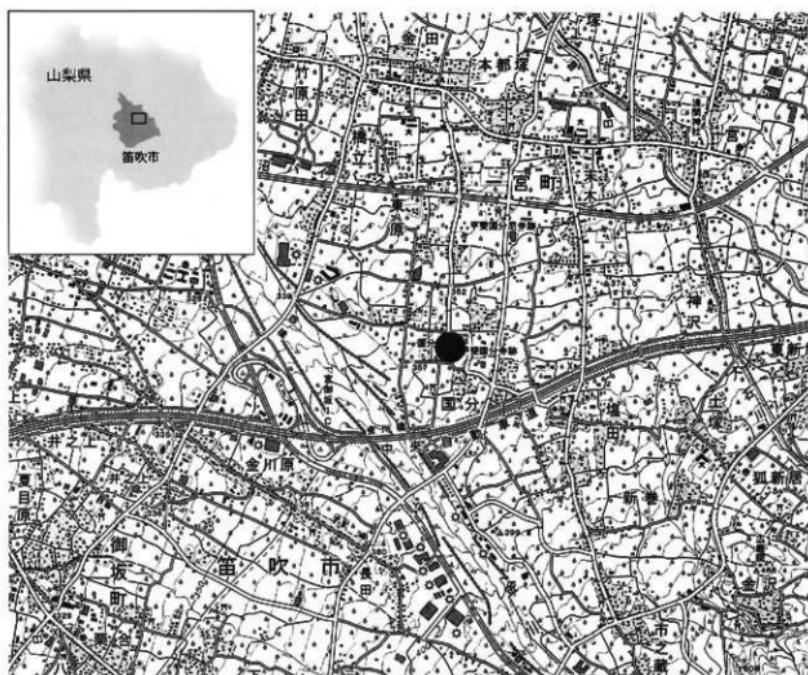
第1節 地理的環境

山梨県笛吹市は甲府盆地中央部やや東よりに位置している。笛吹市は西側に甲府市、東側に甲州市、北側に山梨市、南側に南都留郡富士河口湖町と境を接している。市の総面積は約 201.92km²である。笛吹市の最大の地理的特徴は、市の名前の由来となっている笛吹川が北東から南西へ流れていることである。その笛吹川には、狐川、浅川、金川、日川などの支流が流れ込み、日川には大石川、京戸川などの支流が存在する。市の南東側はこれらの河川により形成された扇状地が広がっている。それに対し、市の北西側は大藏經寺山、兜山、櫛山などの秩父山地の前衛の山々が連なっている。これらの山々の土砂が笛吹川や平等川の流れによって拡散したことによってできた冲積地である。

甲斐国分寺跡は、市の南東の一宮町国分に所在している。国分地区は東南に塙田、北東に末木、北に東原と境を接しており、南西から北西に金川が流れている。甲斐国分寺跡は、その金川の右岸の扇状地のほぼ扇央部に位置している。

第2節 歴史的環境

笛吹市は古代甲斐國の中心地であった。甲斐國分寺跡の北方約 500m の場所に甲斐國分尼寺跡があり、僧寺跡と同様に国の指定史跡である。甲斐國分寺跡北西約 4km の春日居町には国府遺跡があり、そこでは、古代の礎石建物跡などが発見されている。この建物周辺で炭化米が出土しており、古代の役所の正倉の建物跡と推定さ



第2図 甲斐國分寺跡位置図 (1 : 25,000)

れている。そのため、この遺跡は、甲斐国に最初に置かれた国衙跡か、山梨郡の郡家跡と考えられている。国府遺跡の北側には、甲斐国最古の寺院跡である寺本庵寺跡も存在する。この一帯が古代甲斐國の中心地であったことは疑いがない。また、本遺跡から約2.5km 西方の御坂町に国衙という地名が残されており、さらに『倭名類聚抄』に「国府在八代郡」とある。これらのことから、遅くも平安時代には山梨郡にあった国府が笛吹市国衙の地に移転したと推定されている。国衙地区周辺には、甲斐國の二宮である美和神社が鎮座している。

国分寺が所在する旧町名が一宮町であることからもわかるように、甲斐国一宮である浅間神社が本遺跡北東約2kmに鎮座している。ここからも笛吹市域が古代甲斐国を中心であったことがうかがえる。

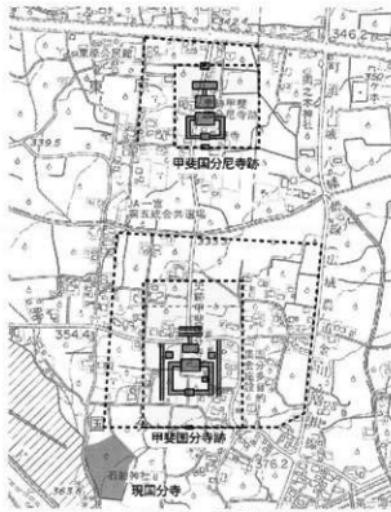
甲斐国分寺跡が所在する一宮町は、遺跡が濃密に分布する地域である。旧石器時代の遺物が出土している遺跡として、甲州市との境の御迎堂遺跡群や物見塚遺跡、本遺跡の南方に位置する笠本地蔵遺跡が知られている。

縄文時代の遺跡では、大変多くの土偶が出土し、これらの土偶や縄文土器が国の重要文化財指定されている糸満堂遺跡、主に前期の上器が出土している清水遺跡などが存在する。甲斐国分寺周辺では、中期の集落である北畠遺跡、また国分寺南遺跡では埋甕が出土しており、本遺跡でも中期後半の土器を表探すことができる。

弥生時代の遺跡では、今宮遺跡・車居遺跡から後期の遺物が出土している。他に豆塚遺跡・天神原遺跡・鞍掛遺跡などでも、弥生時代の遺物が出土している。

古墳時代では、当遺跡のすぐ北側に所在する松原遺跡で、前期の集落跡が調査され、筑前原翠跡でも同期の集落が発見されている。金川左岸の大原遺跡では、中期の集落跡を検出している。また、本遺跡周辺には国分古墳群という後期の群集墳があり、金川右岸には、楽音寺古墳群、左岸には四つ塚古墳群が分布している。また、県内唯一の八角形墳である経塚古墳も金川右岸に存在している。同時期の集落跡では、大原遺跡、北堀遺跡、鞍掛遺跡などがある。

甲斐国分寺が繁栄していた奈良、平安時代の遺跡では、西田町遺跡、桜畠遺跡、車地蔵遺跡、松原遺跡、筑前原塙跡、筑前原北遺跡、北堀遺跡、鞍掛遺跡、大原遺跡、北中原遺跡、車居遺跡、今宮遺跡、車地蔵遺跡、石動遺跡、両ノ木神社遺跡、矢倉遺跡、竜ノ木遺跡などが調査されている。これらの遺跡は国分二寺の創建以後の遺跡であり、国分二寺と深い関係のある集落跡と推測され、「国分寺関連遺跡」とも称される。中世の遺跡では、筑前原塙跡、西田町遺跡、慈眼寺などが調査され、尼寺では地下式土坑が検出されている。



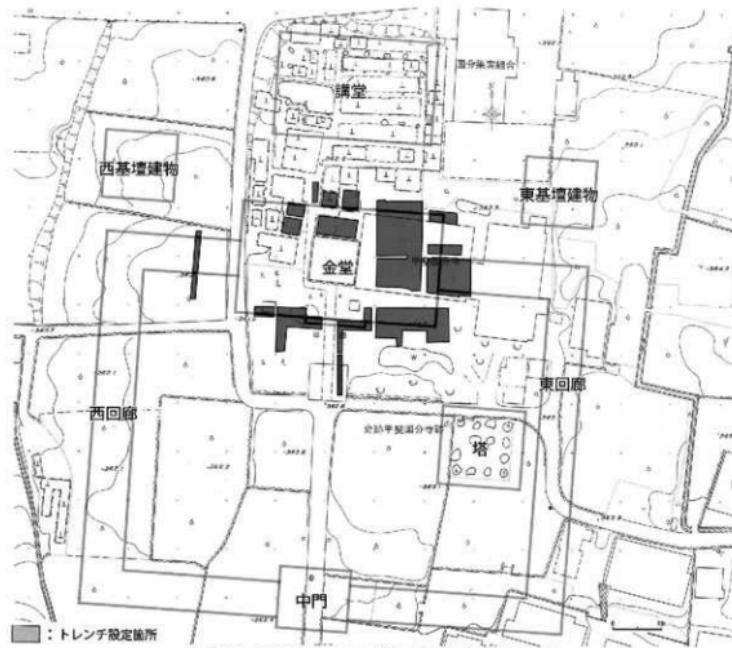
第3図 甲、国分寺跡・甲斐国分尼寺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表

卷	地名	时代
1	山阳分水岭	周鼎、平王、春秋
2	伊水河分水岭	周鼎、平王、春秋
3	长垣县	周鼎、空首、平王、中世
4	大原湖断	古晋、周鼎、平王、春秋
5	金丘断	周鼎、平王、春秋、中世
6	北山丘断	周文、平王、春秋
7	冈山丘断	周文、平王、春秋
8	洛水丘断	周文、平王、春秋、中世
9	北山丘断	平安
10	桓桓断	伯侯、平安
11	河水水冲断	周鼎、平安
12	南水水冲断	周鼎、平安
13	泰山丘断	周鼎、平安
14	泰山丘断	周鼎、平安、中世、近世
15	泰山断	周鼎、平安
16	泰山丘断	周鼎、平安、中世、近世
17	禹丘丘断	伯侯、古邑、邑侯、平安、战国、连结
18	平阳分水岭带禹丘断	伯侯、古邑、邑侯、中世
19	稷山断	伯侯、古邑、侯爵、平安
20	周原北水冲断	周文、平安
21	夏家庄断	周文、平安、中世
22	南水丘断	周文
23	白水丘断	周文、中世
24	白水丘断	周文、平安
25	北山断	周文、中世
26	中阳丘断	周文、中世
27	北山断	周文、中世
28	南水断	周文、中世、中邦
29	木城断	周文、邑侯、平安、中世
30	宝山寺断	周文、邑侯、平安、中世
31	尖山丘断	古晋
32	吕梁丘断	古晋
33	中阳丘断	周文、中世
34	晋中丘断	周文、古晋、平王
35	晋中丘断	周文、古晋、平王、中世
36	西山丘断	古晋
37	西山丘断	古晋



第4図 周辺遺跡分布図(1:10,000)



第5図 金堂跡トレンチ設定図及び中心伽藍想定図

第3章 調査概要

第1節 遺構

金堂南東トレンチ及び金堂正面トレンチ(第7図)

金堂南東トレンチは、昭和45年(1970)に山梨県教育委員会によって調査された場所である。その時、金堂南辺の地覆石と考えられる石を二つ、金堂正面に広がる石敷を確認している。県の調査を再検証するために調査区を設定した。昭和45年の調査で、金堂の東端を確認できていなかつたので、トレンチを東へ拡張し、東端の確認を行い、金堂の東西の大きさのデータを得るために調査をあわせて行った。

昭和45年の調査で確認された自然石を用いた石敷を南北3m×東西3.5mの範囲で検出した。また、その北側に東西方向に長い上面が平らな自然石を2つ発見した。これが、県教委が確認した地覆石である。石敷の南側は、これまであった国分寺の池があったことから、石敷は



金堂南東トレンチ検出状況

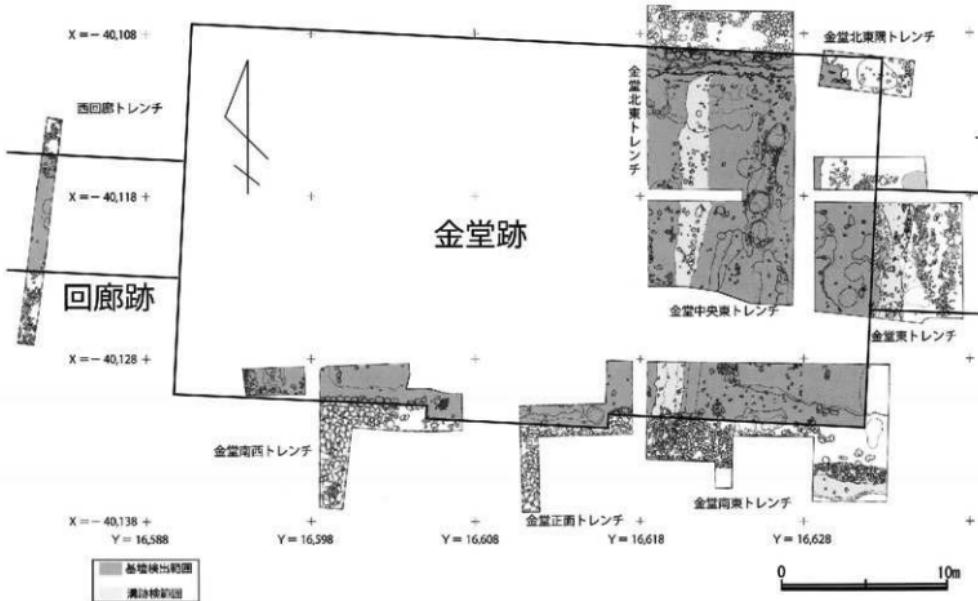
池の造成工事のため壊されたものと思われる。金堂の雨落ち溝は確認されなかった。地覆石の北側は版築が施されていた。金堂の基壇である。昭和45年の調査では、地覆石の北側に南北方向のサブトレンチを設定し、版築の状況を確認しており、今回の調査でも確認した。地山が南側に向かって高くなっている。北側で版築は現状の基壇の上面から約40cm、南側で100cmまでなされ、ローム層の土と暗褐色土や小石を混ぜて突き固め、振り込み地業がなされている。また、石敷の下にまで版築が続いている。今回の調査でもトレントの北壁の東側で、基壇の断ち割りをした。基壇の上面から深い所で約60cmあり、トレント東壁から2m70cmで版築は東へ落ち込んでおり、またその東側から版築が再び始まっている。版築はトレント北東隅のカクランによりとどまっている。金堂の東端の検出にはいたらなかった。

トレントの南東で東西方向の溝を検出しておらず、溝の北側の壁には石が貼られているような状況で発見している。当溝跡の底面から、戦国時代の内耳鍋の破片が出土していることから、戦国時代のものと考えられる。また、調査区の西側に南北方向の溝を確認しており、中世の石製品が出土しており、この溝も中世の遺構である。

金堂正面トレントも、昭和45年に調査されている。平成20・21年度両年にわたり調査を実施した。目的は、昭和45年の『甲斐国分寺跡発掘調査概報』に図が掲載されておらず、金堂跡正面の階段の規模のデータを取ると同時に、記録図面と写真を残しておくことである。また灯籠跡の確認も調査目的の一つである。

結果、このトレントでも金堂正面の南側にひろがる自然石を用いた石敷を検出した。比較的小振りで上面が平らな石が敷き詰められ、どこまで広がるかは判明していないが、金堂正面南側に6m以上はありそうである。

階段前の東西方向の石敷に対し垂直に並べられた石の列が検出された。これが、階段の東端だと考えられる。平成21年度に本トレントの西側に新たにトレントを設定しており、階段の西端を検出している。階段があったと考えられる場所には、石などの階段を構築した材などは発見できなかったが、階段のあった場所は、少し北側に向け盛り上がっており、版築がなされていた。灯籠跡については検出できなかった。



第6図 金堂跡遺構配置図

金堂南西トレントチ(第8図)

この地点は、平成21年度に調査した。金堂正面階段の西端を確認するためにトレントチを設定した。金堂南東トレントチで地覆石が2つ見つかっており、さらに、石敷が地覆石から南へ3m(約10尺)確認されたので、この地点でも地覆石などを確認して金堂南辺を確定し、石敷がどのくらいまで広がるかを確認するのも目的である。

ここでは、金堂基壇、石敷などを検出した。遺構面を確認したとき、基壇との境に並んでいる石の列は、その南側の石敷とほぼ同じレベルで確認されたため、石敷の北端と考えていたが、石列の南側のラインがほぼ同一線上に並んでいること、他の石に比べ長い方を東西方向にむけて並べられていることなどから、地覆石の可能性が高まった。整理作業で金堂跡の範囲を想定するために図を作ると、金堂南東トレントチで確認された地覆石の南側のラインとこの石列の南側のラインが同一線上にくることがわかった。つまり、一番北側の石列は地覆石の列になる。また、本石列の一一番東の石だけが長い方を南北にして据えられていた。そのため、当石が金堂正面の階段の西端と考えられる。階段の東端から西端までの幅は10.8mあることが判明した。この地点の石敷は、比較的大振りで上面が平らな石が敷かれている。また、長い方を南北方向に向けて並べられている石が多くあり、石敷は南北6m以上ある。この地点でも雨落ち溝は発見できなかった。これらの石はすべて自然石である。

また、現国分寺が移転する前にこの地点に「薬師経石等」という石塔があり、その石塔の下と思われる場所から大変多くの一字一石経が出土している。この石塔には文政10年(1827)と銘記されているので、一字一石経は文政10年に埋められたものであろう。

金堂北東トレントチ及び金堂中央東トレントチ(第9図)

金堂北東トレントチは平成20年度に調査した。金堂の北端を確定すること、昭和45年の調査で金堂の南側に石が敷かれていたことがわかっていたので、金堂北側にも石敷がひろがっているかを確かめるのが目的である。

トレントチの中央部は石が残ってなかつたが、その周辺には自然石を使用した石敷が広がっていた。この地点でも雨落ち溝は確認されなかった。石敷は、北・東西方向にどのように広がっているかは今後の調査の課題である。地覆石の列を検出し、金堂北側のラインが確定できた。南東トレントチで金堂南側の地覆石を確認しているので、南辺の地覆石と北辺の地覆石の距離は22.6mあることが判明した。つまり、金堂基壇の南北の大きさは22.6mであることになる。地覆石の南側は比較的緩やかな傾斜を持つ基壇で南側へ向け盛り上がりしている。この西側の壁で基壇の断ち割りを行い、結果、現状の基壇上面から深さ約80cmまで版築層があり、掘込地業の底面と石敷の面とほぼ同じレベルであった。地覆石や石敷には自然石が用いられているので、基壇化粧は乱石積と推測される。

金堂中央東トレントチは、平成20・21年度にわたって調査した。礎石の発見と礎石が発見できなかった場合、礎石の元あった位置とその配列の確認のためにトレントチを設定した。

平成20年度の調査で、礎石に使用されたと考えられる大きな自然石を南北方向に3つ発見した。北側の石は、約150cm×約120cmあり、平らな面を上にしてすわっていた。また、その石の周囲には、径約30cmの礫が



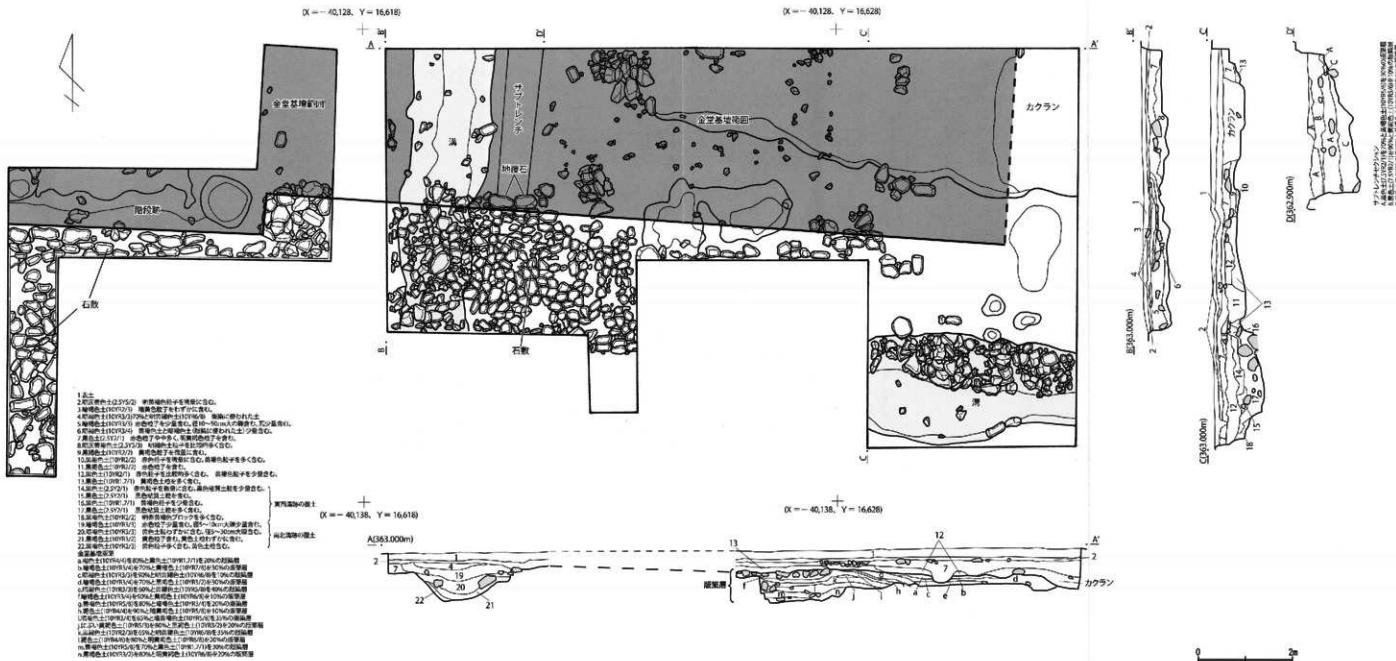
階段跡検出状況



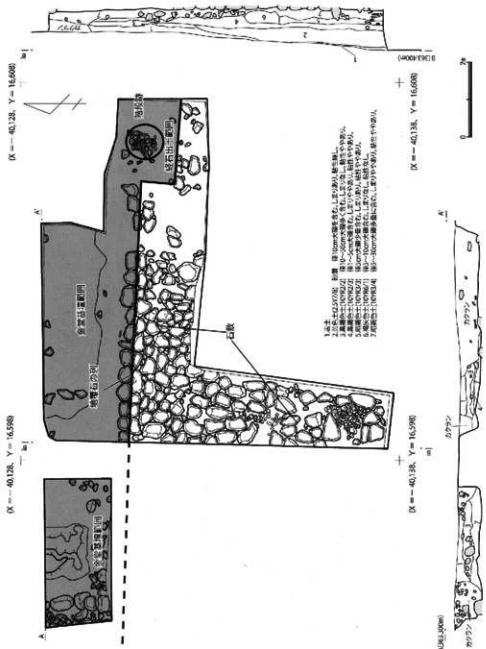
金堂正面階段付近検出状況



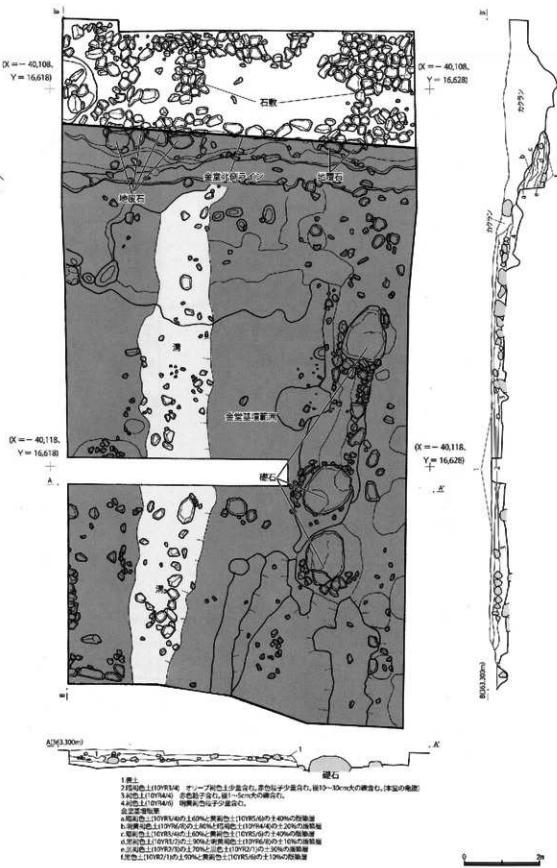
一字一石経出土状況



第7図 金堂正面トレンチ・南東トレンチ平面図・土層断面図



第8図 金堂南西トレンチ平面図・土層断面図



第9図 金堂北東及び中央東トレンチ平面図・土層断面図

敷かれている。しかし、石の上面は北へ傾いており、元の位置から動いている様子が読み取れる。中央の石は約120cm×約100cmあり、丸い面を上にした状況で発見している。基壇に接している面は、石をはつたような跡があり、石を割って動かしたものと思われる。南側にある石は約140cm×約100cmあり、西側の面が平らであり、その面に柱が立っていたものと考えられる。この石は、基壇に穴を掘ったところへ落とし込まれたものと推測される。つまり、国分寺を新しく建て直すときに邪魔になるこの石をどかすために穴を掘って埋めたものだろう。

平成21年度の調査では、前年に礎石が発見できたので、礎石の配列を確認するためにトレンチを広げた。しかし、ほかに礎石は発見できず、元礎石のあった場所にある根石や掘り込んだ跡も確認することができなかった。また、トレンチの西側に金堂南東トレンチで見つかっている南北方向の溝の続きを検出している。

金堂北東隅トレンチ及び金堂東トレンチ(第10図)

金堂北東隅トレンチは、平成20・21年度に調査を実施した。金堂の北東隅を確認することで金堂の東西の幅を確定するのが目的である。

平成20年度の調査で、トレンチの西で地覆石に使用されたと考えられる石を発見した。石は長い方を南北方向にして据えられている。最初はこれが金堂東の地覆石と考えたが、平成21年度に本トレンチの南側の金堂東トレンチを調査したところ、その石より東側に基壇が延びており、この石は元の位置にないことが判明した。金堂の北東隅と考えられる場所は、10～12世紀の土師器や瓦が多く捨てられている土器捨て場であり、特に11世紀の土師器が多いことから、この時期に、金堂は規模を縮小したか、機能を停止したと考えられる。

金堂東トレンチは、平成21年度に調査した。範囲確認調査の時に回廊が金堂に取り付いていたことがわかっているので、回廊が金堂の側面のどこに取り付くのかを確認するためのトレンチである。また、金堂の東端を確認し、金堂の東西の大きさを確かめるための調査である。

金堂の東端と思われる場所は、戦国時代の遺物が多く出土し、この時代の遺物が出土する南北溝に壊されており東端の確定はできなかった。また、溝跡の西側にこぶし大ぐらいの石が南北に並んでいる長さ約3.4mの石列を検出しており、その東には石列の石より小さな石が敷き詰められていた。この遺構は、先ほど述べた南北溝に壊されているので、その溝より古いものである。しかし、この遺構に伴う遺物を判別するのは難しく、遺構が作られた時代の確定にはいたっていない。金堂東端の基壇との境ははっきりとはしていないが、基壇の統一している様子から、金堂基壇の東西の規模は約41～42mになりそうである。

溝の東側で集石を検出している。その石の間から、繩文期に鉄造された甲州金が出土したため、この遺構は当時代より新しく、江戸時代に国分寺の本堂が建てられた(享保年間)間の時代のものである。回廊の取り付け部については、中世以降の造成により、このトレンチの調査では不明である。

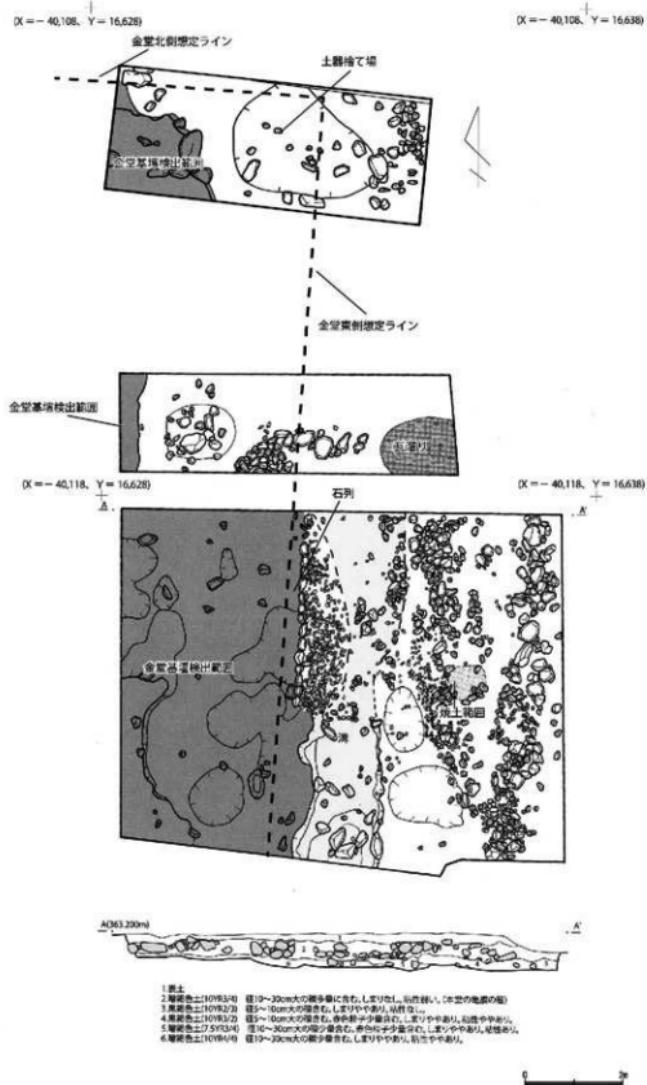


金堂東トレンチ(北)瓦礫り検出状況

西回廊トレンチ(第11図)

今回調査した付近で、昭和58年の寺域確認調査の時に南北方向に延びると考えられる回廊の跡を発見している。また翌年の調査で、今回の調査地点の北側にトレンチを入れたところ、別の建物の基壇を検出している。このことから、回廊は講堂ではなく、金堂に取り付いていることがわかっている。今回の調査の金堂東側トレンチで回廊が取り付く場所を特定できなかったため、金堂の西のはずれの東西に延びる回廊が存在すると想定される場所にトレンチを設定した。回廊が金堂の側面のどこに付くのかを調べるのが目的である。

昭和58年の調査で確認されたものと同様の幅約6mの東西に延びる基壇を検出した。これが回廊の跡と考え



第10図 金堂東トレンチ及び金堂東西隔トレンチ平面図・土層断面図

られる。回廊の北側、南側には大変多くの礫を検出している。回廊の礫石や礫石の根石、雨落ち溝などは確認できなかった。

今回の調査の目的である金堂との接続部の確定であるが、図面上で金堂の南北の中心軸で回廊の位置を折り返すと、金堂側面の中央部に回廊が取り付くことが判明した。



西回廊検出状況（北から）

第2節 遺物

瓦類

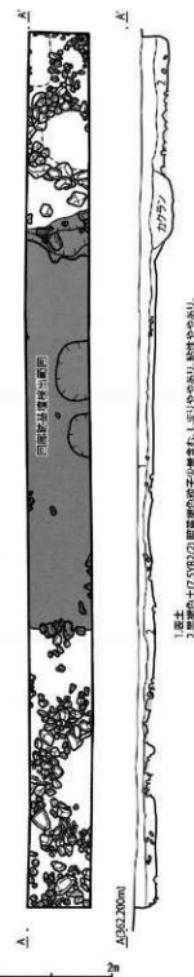
金堂跡周辺のトレンチから大量の瓦が出土し、瓦の種類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・隅切瓦・鬼瓦・埠といった瓦に分類できる。軒瓦の分類については、平成2年一宮町教育委員会刊行の『甲斐国分寺跡』の分類を基本とし、櫛原功一氏による分類を参考にしている（ローマ数字とアルファベットの組み合わせは『甲斐国分寺跡』の分類（猪股分類）、アルファベットと数字の組み合わせは櫛原氏による分類（櫛原分類）である）。今回の報告では特徴的なものを図示するにとどめ、さらに詳しい分類などに関しては本報告書に譲ることにする。

(1) 軒丸瓦 (第12・13図)

第12図はI型式のもので、素弁八葉蓮華文。外区は二重の圓線が巡り、中房内に1+8の蓮子を配しており、卵形に隆起した蓮弁をもつものである。1~6までは、IAbに分類され、瓦当径が170mm前後あるものである。瓦当裏に半円形の溝をつけ、丸瓦部を差し込む方法、いわゆる印籠付けによる技法で成形されている。色調は褐灰色または灰色である。7はIBに分類されるもので瓦当径が164mmあり、やや小ぶりのものである。色調は灰色である。8~10・11は、IC形式で、瓦当径が176~180mmの大形のものである。

明褐色などの色調を呈し、軟質である。9は瓦当径が184mmと大形で、瓦当厚が46mmと薄く、猪股分類、櫛原分類とともに分類されていないものである。色調は黒色で、緻密である。鳥糞に類するものかもしれない。

第13図12~17はII型式に分類されるもので、文様は複弁八葉蓮華文である。外区内縁には珠文が32個配されている。12は瓦当径が176mm、瓦当厚が40mmというものである。II A形式にしては、瓦当径が少々小ぶりで、瓦当厚は薄手である。色調はにぶい橙色である。13は瓦当径が185mmと少々大きく、瓦当厚は40mmと薄手である。色調は灰褐色である。14は瓦当径が180mmで、瓦当厚が60mmというII B形式にあ



第11図 西回廊トレンチ平面図・土層断面図

たるものである。15は瓦当径175mm、瓦当厚53mm、16は瓦当径180mm、瓦当厚45mm、17は瓦当径168mm、瓦当厚52mmで、瓦当径はまちまちであり、瓦当厚は45～53mmである。瓦当と丸瓦との接合技法が印籠付けによるものであることから、櫛原分類のM5(3)にあたるものかもしれない。

第13図18・19はⅢ型式であり、複弁六葉蓮華文で、外区内縁には唐草文を変形した文様がめぐる。色調は両者ともに褐色を呈している。18は、櫛原分類によるとM8Aとされるもので、19はM8Aの周囲を削ったタイプのM8Bとされるものである。

第13図20・21はⅣ型式であり、複弁四葉蓮華文である。外区内縁には珠文帯がある。

(2) 軒平瓦(第14・15図)

第14図22～24は、I型式に分類されるもので、均整唐草文の軒平瓦である。22～24はIA型式で、外区・脇区に珠文帯がめぐっている。22は瓦当の端から平瓦の端まで残存している。

第14図25～第15図26はIB型式である。IA式の外区・脇区の珠文帯がないものである。

第15図27～29はII型式で、I型式に酷似しているが、中心飾りは交差している二つのC状の唐草文の上部に弧状文がつく均整唐草文である。外区は素文である。

30は均整唐草文で、これまでの甲斐国分寺跡の調査では未発見の資料である。櫛原分類によるとH5型式とされるものである。これまででは、平成2年の甲斐国分尼寺跡の調査時と尼寺に接する車地蔵遺跡で出土している。また、山梨県古代官衙・寺院跡詳細分布調査での瑜伽寺の調査の際にも見つかっている。今回の調査で初めて僧寺からも発見された。金堂跡東側の金堂と回廊との取り付きを調べるためのトレンチから出土している。

31はIII型式の均整唐草文のものである。外区は素文で文様構成はI型式に似ているが、中心飾りがC状の交差する唐草文とその上部に花頭を意識した円の構成をとる。しかし、文様は退化傾向にあり、唐草文は巻き込みが弱く直線的に展開している。金堂の南西トレンチから出土している。

32・33はV型式に分類される均整唐草文の軒平瓦である。中心飾は、牛角状の中心葉とその上方に扇形に聞く五葉の花頭からなる。そこから左右に三回反転する唐草で構成され、外区は素文である。平成2年の『甲斐国分寺跡』において国分寺所蔵以外では、すべて塔跡での出土はあるが、金堂でも使用されていたと考えられる。

34は、これまでの調査で2点だけ確認されているものである。前回の範囲確認調査の報告書では未報告のものであり、櫛原氏の分類によるとH11型式とされるものである。全体が残っている資料が無いため、文様の全体は不明であるが、均整唐草文であろう。金堂の南西トレンチから出土している。

35・36はVI型式に分類される。中心は「十」字状の花頭で、そこから左右に三回反転する唐草で構成される。外区は二重の弧線が巡っている。金堂跡北東トレンチ及び北東隅トレンチから出土している。

37はV型式に分類される重弧文の軒平瓦である。三重弧文である。金堂正面トレンチからの出土である。

38は平成14年の桜井畠跡の調査において、10世紀前半～中頃が上器が出土しているSB13号竪穴建物跡のカマドの埋土の上部で見つかっている。均整唐草文で、花頭の模様は今まで今遺跡から出土した軒平瓦にはみられないような簡略化されたものである。外区内縁には珠文帯が巡っている。

(3) 丸・平瓦(第16・17図)

出土した瓦のほとんどが丸・平瓦であった。大変多くの瓦が出土したのにもかかわらず、完全な形で出土したものは皆無に等しい。今回の報告では、比較的残存が良好なものを選んで掲載した。したがって、瓦の分類については本報告の機会に譲ることにする。

第17図44は、平瓦の外面に「馬」という字が先の尖ったもので書きかれている。瓦が焼かれた後に書きれており、金堂が機能していた時期ではなく、その後の時代に書きられた可能性もある。

(4) 道具瓦(第18図)

道具瓦は、鬼瓦・隅切瓦が出土している。鬼瓦はこれまで確認していた鬼面文鬼瓦の一部で、鼻と牙の部分である。黒色または、褐色を呈している。

第18図49は隅切瓦で、内面に布目が残っている。

(5) 塚(第18・19図)

今回の報告では七個体掲出した。第19図51・52・53・55はにぶい橙色を呈し、他は灰色から褐灰色であった。53は、隅切の塚であり、面取りが施されている。

土器類(第20~24図)

今回の調査で出土した土器類は、出土した瓦の量に比べるとそれほど多くはない。环・皿・蓋が出土して

いる。1が8世紀中頃の土器で、2~4は8世紀末から9世紀にかけてのもの、5~11は9世紀中頃、12~17は10世紀頃の土器、18~78は11世紀、79~83は11世紀末から12世紀のものである。土器は、どのトレンチからも出土しているが、特に多く出土しているのは、北東隅トレンチである。このトレンチは土器捨て場の様相を呈し、9世紀代から12世紀代までものが出土している。特に11世紀代の土器が多く、完形品もこの時代のものが多い。先述したとおり、金堂の北東隅基壇をこの土器捨て場が壊しているので、ここから、金堂はおよそ12世紀にはいるぐらいまで機能していたことになる。

墨書き器も出土しており、34は底部に墨書きがあり、「道」と読める字が書かれている。金堂と回廊の取り付きを調べるための東トレンチから出土している。

須恵器も出土しており、环・蓋・甕・壺が出土している。須恵器にも墨書きがあり、85は环で底部に「中門」と書かれているようである。また、それほど多くは無いが、灰釉陶器も出土しており、椀・長頸壺を確認している。

泥塔・不明土製品(第25図)

第25図1~3までは泥塔である。金堂南西トレンチから出土している。1は笠部である。

4は不明の土製品である。断面は五角形を半分にしたような形である。表面は磨耗しており、平らな面は表面の半分がざらついており、もう半分は滑らかになっており、滑らかな面に何かが接合していたと思われる。焼きは瓦と酷似しており、小型の鶴尾の一部の可能性がある。

5も不明の土製品である。断面は半円形で、表面は平らな面の半分に溝が刻まれており、もう半分は滑らかに成形されている。半円状の表面はナデ成形されており、光沢がある。



金堂北東隅トレンチ状況

第4章 調査の成果と課題

今回の発掘調査によって、次のことが明らかになった。

金堂の規模については、南北と東西の地覆石の列を確認できたため、南北22.6mあることがわかった。金堂の東西の規模は、東西の地覆石の列等を検出することができなかつたので、大きさの確定にはいたらなかつた。しかし、金堂東側の基壇の広がっている範囲を金堂の南北の中軸線で折り返してみると、約41~42mはありそうである。

金堂の建物の規模については、礎石に使われたと考えられる巨石を3つ検出したが、元の位置にはなかつた。また、根石など礎石がすえられていた跡の検出にもいたらなかつた。そのため、金堂の柱の配置は不明である。このことから、金堂の基壇は後の造成などにより相当削られていると考えられる。

金堂正面の階段幅については、階段の東端と西端を検出することができた。正面の階段は、幅10.8mあることがわかつた。

昭和 58 年の調査で回廊が存在することと、昭和 59 年の調査で、回廊が見つかった北側の地区より西基壇物が見つかっていることから、回廊は金堂に取り付いていることがわかっている。金堂側面に回廊が取り付いている場所を特定することも今回の調査の目的の一つであった。金堂東トレンチを設定して、解明に取り組んだが、中世の溝跡や近世初期（鐵期）の集石により、古代の遺構が壊されていたため、回廊の取り付け部はわからなかった。そのため、このトレンチとは逆の西側の回廊が存在するであろう場所にトレンチを設定した。東西に延びる回廊と思われる基壇を確認できた。検出した基壇を金堂の巾輪線で折り返してみると、金堂側面の中央部に接続することが判明した。

昭和 45 年県教委の調査で基壇の断ち割るトレンチが設定されており、掘り込み地盤がなされていることがわかっている。現在残されている金堂基壇上面から約 40cm ~ 1m まで掘られており、そこから版築をしている。

金堂の地盤石は自然石を用いており、また、金堂周辺に広がる石敷も自然石を使っていることから、基壇化粧は乱石積と考えられる。

昭和 45 年の調査でも雨落ち溝は検出されず、金堂正面に石敷を発見している。昭和 45 年の『概要報告書』では石敷が雨落ち溝の機能を果たしていたと指摘している。今回の調査でも、金堂正面に南北 6m 以上の石敷を確認した。また、金堂の北側にも石敷を確認している。つまり、金堂の周囲には雨落ち溝を設けることはせずに、石を敷いて雨水を処理していたと想定できる。ちなみにこれらの石も自然石である。

出土遺物からみると、古代では創建期の 8 世紀中葉の土器から 12 世紀までの遺物が出上している。この時期が本格的に国分寺が機能していた時期であると考えられる。特に、北東隅トレンチは基壇があると想定されるにもかかわらず、大変多くの土師器の破片が出土する上器捨て場の様相を呈しており、基壇の存在は確認されなかつた。基壇は十器捨て場に埋められることになり、特に 11 世紀の土師器の环が大量に出土したことから、金堂はこの後に役割を終えたか、規模を縮小したかのどちらかであろう。

瓦については、櫛原分類の H5 型式の軒平瓦（第 15 図 30）が出土したことが今回の一つの大きな収穫であった。この型式は、尼寺と南向市八代町の瑜伽寺などで出土していたが、僧寺では今まで出土例が無かった。H5 型式は僧寺、尼寺共通の型式であることがわかった。

課題としては、金堂の柱の位置の確定ができなかったことである。金堂基壇は、中世以降の造成により相当削られていると思われ、礎石の位置は不明であった。これから史跡整備していく上で、最大の課題となる。柱位置の復元に関しては、金堂正面の階段幅が一つの解明の鍵になろう。講堂には、多くの礎石が残されており、講堂の中央間が 4.2m である。金堂正面の階段幅が 10.8m であることから、講堂の柱間と相関関係があるとすれば、金堂正面の階段幅は柱間三間の広さであろうと推測される。ここから、柱の位置を確定していかなければならない。また、今回の調査で西面回廊の残りがよさそうで、さらに回廊が金堂に取り付いているので、そこから推測することも可能であろう。

さらに、金堂の中央の柱間三間が 10.8m で、金堂基壇の東西幅が約 41 ~ 42m あるとすると、桁行き七間では、基壇の規模が大きすぎることも問題となる。桁行きが九間になるのか、梁階が付くのかといったことも課題となる。

金堂裏の階段については、今まで言及されている国分寺の檀家の墓にあたっており、既に壟されていて解明には至らなかった。これは、講堂などの調査を参考にしながら復元していかなければならぬ。

金堂の周囲に石が敷かれていたことがわかったが、これがどの範囲まで敷かれていたかはこれからの課題となる。この石敷は雨落ち溝を兼ねており、どのように雨水を処理していたかも課題である。石敷は排水のためだけでなく、寺を莊嚴に見せるための演出であることも敷いた理由であろう。また、金堂南東トレンチのすぐ北東に石製の露盤が今日でも残されている。甲斐国分寺には相当の量の石が使われていたと考えられ、「石の国分寺」とも呼べる様相を呈していたのである。

金堂の須弥壇は、これまで続いている国分寺の薬師堂の位置にあたりそうである。甲斐国分寺の一番の聖地は、その後にも引き継がれ、釈迦三尊から薬師如来が安置されている場所へと替わっていったのである。

(参考文献)

- 宇都宮教育委員会 1982 「越後伊勢田分界跡」
 一宮町教育委員会 1983 「火薙中野町分界跡」
 一宮町教育委員会 1990 「甲斐源分界跡・甲斐及び邊境確認を目的とした災害発生調査報告書」
 群馬県 1996 「川西郡小寺地内における集落構造と隣郷に対する若干の考察」群馬県考古学報告書 第7号
 群馬県 2002 川西郡小寺地内における集落構造と隣郷に対する若干の考察」群馬県考古学報告書 第13号
 中山市教育委員会 2008 「山形勝利田塙御殿跡(板井城跡・板井源林・川田久保田跡)」山形市文化財保護委員会報告書
 横浜市 1991 「横浜市分界の確認」『帝大古文書刊行会』第4集
 大山田六 1943 「中野町分界地の研究」『考古学論叢』第33巻8号
 南都留 1995 「甲斐源分界の成り立て」『山形県考古学報告書』第6号
 山形県 1998 「石垣丸」資料編1 原始・古代1
 山形県 1999 「山形県史」資料編2 原始・古代2
 山形県 2001 「山形県史」資料編3 原始・古代3
 山形県 2004 「山形県山道史」原始・古代
 山形県教育委員会 1970 「甲斐源分界地の確認」
 山形県教育委員会 1983 「火薙町の近辺等遺跡」
 山形県教育委員会 1995 「山形県古代官道・寺町の開拓行為の調査報告書」

遺物観察表

第2表 軒丸瓦観察表

番号	山土地区	文様	底面		側面		色調	形状	備考
			直径(cm)	厚さ	全面	内面			
12_1	南西トレンチ	吉井八葉唐草文	(17.0)	4.5	ナデ	ナデ	褐色	直	印彫付けによる複合
12_2	南西トレンチ	吉井八葉唐草文	(17.0)	4.5	ナデ	ナデ	褐色	直	印彫付けによる複合
12_3	南西トレンチ	吉井八葉唐草文	(17.0)	4.5	ナデ	ナデ	褐色	直	印彫付けによる複合
12_4	北東トレンチ	吉井八葉唐草文	(17.0)	4.5	ナデ	ナデ	褐色	直	印彫付けによる複合
12_5	南西トレンチ	吉井八葉唐草文	(17.0)	4.5	ナデ	ナデ	褐色	直	印彫付けによる複合
12_6	南西トレンチ	吉井八葉唐草文	(17.0)	4.0	ナデ	ナデ	褐色	直	印彫付けによる複合
12_7	中央東トレンチ	吉井八葉唐草文	(16.4)	5.4	ナデ	ナデ	褐色	直	印彫付けによる複合
12_8	中央東トレンチ	吉井八葉唐草文	(17.6)	4.0	ナデ	ナデ	褐色	直	印彫付けによる複合
9_9	北トレンチ	吉井八葉唐草文	(8.4)	1.8	ナデ	ナデ	黒色	直	直
12_10	南西トレンチ	吉井八葉唐草文	(18.0)	4.0	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	直	にぼい褐色
12_11	南西トレンチ	吉井八葉唐草文	(18.0)	4.0	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	直	にぼい褐色
13_12	正面トレンチ	復元八葉唐草文	(17.6)	1.0	—	—	褐色	直	にぼい褐色
13_13	北東トレンチ	復元八葉唐草文	(8.5)	1.0	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	直	にぼい褐色
13_14	北東トレンチ	復元八葉唐草文	(18.0)	6.0	ナデ	ナデ	褐色	直	直形台・一本作り
13_15	北東トレンチ	復元八葉唐草文	(8.0)	4.5	ナデ	ナデ	褐色	直	印彫付けによる複合
13_16	南西トレンチ	復元八葉唐草文	(17.5)	5.3	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	直	にぼい褐色
13_17	北東周トレンチ	復元八葉唐草文	(16.8)	5.2	ナデ	ナデ	褐色	直	印彫付けによる複合
13_18	南西トレンチ	復元八葉唐草文	(16.8)	4.5	ナデ	ナデ	褐色	直	にぼい褐色
13_19	南西トレンチ	復元八葉唐草文	(18.0)	4.0	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	直	にぼい褐色
13_20	南西トレンチ	復元八葉唐草文	(18.0)	2.0	—	—	褐色	直	にぼい褐色
13_21	北東トレンチ	復元八葉唐草文	(18.0)	2.0	—	—	褐色	直	にぼい褐色

第3表 軒平瓦観察表

番号	山土地区	文様	法算		調査		色調	形状	備考
			全長	下弦長	厚さ	内面			
14_22	北東トレンチ	吉井唐草文	35.0	—	—	斜格子印	褐色	ヨコナデ	直
14_23	東トレンチ	吉井唐草文	—	—	7.0	斜格子印	褐色	ヨコナデ	直 I A
14_24	南西トレンチ	吉井唐草文	—	—	10.5	斜格子印	褐色	ヨコナデ	直 I A
14_25	南西トレンチ	吉井唐草文	—	—	29.0	7.3	ナデ	ヨコナデ	にぼい褐色
14_26	南西トレンチ	吉井唐草文	—	—	31.6	8.0	タテナデ	ヨコナデ	にぼい褐色
15_27	南西トレンチ	吉井唐草文	—	—	30.0	7.6	ナデ	ヨコナデ	にぼい褐色
15_28	中央東トレンチ	吉井唐草文	—	—	6.8	ヨコナデ	褐色	ヨコナデ	直 I B
15_29	北東トレンチ	吉井唐草文	—	—	7.7	ナデ	ナデ	ナデ	にぼい褐色
15_30	東トレンチ	吉井唐草文	—	—	7.0	ヨコナデ	褐色	ヨコナデ	直 I C
15_31	南西トレンチ	吉井唐草文	—	—	6.0	ヨコナデ	褐色	ヨコナデ	直 I D
15_32	南西トレンチ	吉井唐草文	—	—	9.4	ヨコナデ	褐色	ヨコナデ	直 I E
15_33	東トレンチ	吉井唐草文	—	—	—	—	褐色	褐色	不規 I V
15_34	南西トレンチ	吉井唐草文	—	—	8.0	ヨコナデ	褐色	ヨコナデ	にぼい褐色
15_35	北東トレンチ	吉井唐草文	—	—	5.3	タテナデ	褐色	ヨコナデ	直 I F 形式(標準輪年)
15_36	北東トレンチ	吉井唐草文	—	—	6.2	タテナデ	褐色	ヨコナデ	直 I G
15_37	南西トレンチ	吉井唐草文	—	—	9.0	タテナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	直 I H
15_38	北東トレンチ	吉井唐草文	—	—	7.8	タテナデ	褐色	ヨコナデ	直 I I 甲山日根跡跡地出土。

第4表 丸瓦・平瓦観察表

番号	山土地区	種別	法算		調査		色調	形状	備考
			幅	高	厚さ	内面			
16_39	南西トレンチ	丸瓦	—	10.0	2.5	布目	ナデ	灰白色	直
16_40	南西トレンチ	丸瓦	—	15.4	2.6	斜格子印	ナデ	褐色	直

17	41	東トレンチ	半瓦	-	2.0	布印の後ナデ	ナデ	灰色	良
17	42	北東トレンチ	平瓦	-	2.0	布印	開口、ナデ	褐色～泥灰色	良
17	43	南西トレンチ	半瓦	-	2.5	ナデ	開口	褐色	良
17	44	南東トレンチ	平瓦	-	1.8	布印の後ナデ	ナデ	灰褐色	良
17	45	北東トレンチ	半瓦	-	2.8	布印	開口の後ナデ	にぶい褐色	良

第5表 道具瓦・埠観察表

固形 番号	出土地区	種別	法線(cm)		調整		色調	焼成	備考
			縦	横	厚さ	内面			
18	46	南東トレンチ	瓦瓦	-	4.2		褐色	良	
18	47	正断トレンチ	瓦瓦	-	-	褐色	良		
18	48	中央トレンチ	瓦瓦	-	5.2		褐色	良	
18	49	南西トレンチ	開口瓦	-	3.0	布印	にぶい褐色	良	
18	50	東トレンチ	埠	-	6.5		褐色	良	
19	51	東トレンチ	埠	-	7.0		にぶい褐色	良	側面に布印
19	52	北東トレンチ	埠	-	7.6		にぶい褐色	良	
19	53	東トレンチ	埠	-	5.5	布印、ヘラケズリ	にぶい褐色	良	側面が剥がされている。開口り埠
19	54	北東トレンチ	埠	-	8.5		褐色	良	
19	55	北東トレンチ	埠	-	-		褐色	良	
19	56	北東トレンチ	埠	-	8.3		にぶい褐色	良	

第6表 土器類観察表

固形 番号	種別	出土位置	法線(cm)		調整	色調	施上	焼成	備考
			縦	横					
20	57	土師器・坪	山東トレンチ	(12.8)	-	外側：ナデ 内面：端文	褐色	白色粒子	良
20	58	土師器・坪	南東トレンチ	-	(6.0)	内面：端文	褐色	白色粒子、石英	良
20	59	土師器・坪	北東トレンチ	(12.8)	2.5	外側：(4.6) 内面：(4.6) 布底：ヘラケズリ	褐色	白色粒子、白色粒子	良
20	60	土師器・坪	北東トレンチ	-	(5.0)	外側：(4.6) 布底：ヘラケズリ 内面：端文	褐色	白色粒子、白色粒子、金粉	良
20	61	土師器・坪	南東トレンチ	(11.0)	-	内面：端文	褐色	白色粒子、白色粒子	良
20	62	土師器・坪	北東トレンチ	(10.0)	-	外側：ナデ 内面：黑色處理	褐色	白色粒子	内面にスス付着
20	63	土師器・坪	南西トレンチ	(11.4)	5.4	外側：(4.6) 布底：(4.6) 布切：ヘラケズリ	褐色～黑色	白色粒子、白色粒子	良
20	64	土師器・坪	南西トレンチ	(10.8)	3.7	5.4 内面：端文 底部：(4.6) 布切：(4.6) 布切：ヘラケズリ	褐色	白色粒子、白色粒子、金粉	内面にスス付着
20	65	土師器・坪	北東トレンチ	(16.0)	-	外側：ナデ 内面：端文	褐色	白色粒子	良
20	66	土師器・坪	南東トレンチ	-	(4.0)	内面：端文	褐色	白色粒子、白色粒子、石英	良
20	67	土師器・坪	東トレンチ	-	(5.8)	外側：ナデ 内面：端文 底部：(4.6) 布切：(4.6) 布切	褐色	白色粒子、石英、金黄	良
20	68	土師器・坪	北東トレンチ	(15.0)	-	外側：ナデ 内面：ナデ	褐色～黑色	白色粒子、白色粒子	内輪周辺にスス付着
20	69	土師器・坪	南東トレンチ	(11.0)	3.7	(5.0) 外側：(4.6) 布切：(4.6) 布切：(4.6) 布切	褐色	白色粒子、白色粒子	良
20	70	土師器・坪	南東トレンチ	(12.4)	-	外側：ナデ	褐色	白色粒子、白色粒子、金粉	良
20	71	土師器・坪	正断トレンチ	-	-		褐色		良
20	72	土師器・坪	北東トレンチ	(13.4)	-	外側：ナデ	褐色	白色粒子、白色粒子	内面にスス付着
20	73	土師器・坪	丘東トレンチ	(11.8)	-		褐色	白色粒子、金粉	良
20	74	土師器・坪	北東トレンチ	12.8	3.3	6.2 外側：ナデ 内面：ナデ 底部：(4.6) 布切：(4.6) 布切	褐色～黑色	白色粒子、白色粒子	山脚部にスス付着
20	75	土師器・坪	北東トレンチ	12.2	3.0	6.0 外側：ナデ 内面：ナデ 底部：(4.6) 布切：(4.6) 布切	褐色	白色粒子	良
20	76	土師器・坪	北東トレンチ	(11.2)	3.1	6.0 外側：ナデ 内面：ナデ 底部：(4.6) 布切：(4.6) 布切	褐色	白色粒子、白色粒子	外側にスス付着
20	77	土師器・坪	北東トレンチ	(11.6)	2.5	5.8 外側：ナデ 内面：ナデ 底部：(4.6) 布切：(4.6) 布切	褐色	白色粒子、白色粒子、石英	内・外側にスス付着
20	78	土師器・坪	北東トレンチ	12.0	3.1	6.0 外側：ナデ 内面：ナデ 底部：(4.6) 布切：(4.6) 布切	褐色	白色粒子、白色粒子、金粉	内・外側にスス付着
20	79	土師器・坪	北東トレンチ	(13.0)	3.0	4.8 外側：ナデ 内面：ナデ 底部：(4.6) 布切：(4.6) 布切	にぶい褐色	白色粒子、白色粒子、金粉	外側は膨張が激しい
21	80	土師器・坪	北東トレンチ	(12.0)	2.7	(5.4) 外側：黑色處理 底部：(4.6) 布切：(4.6) 布切	外側：にぶい褐色 内面：黑色	白色粒子、白色粒子、金粉	良
21	81	土師器・坪	北東トレンチ	(12.0)	3.2	(5.4) 外側：ナデ 内面：ナデ 底部：(4.6) 布切：(4.6) 布切	褐色	白色粒子、白色粒子、石英	良
21	82	土師器・坪	北東トレンチ	(11.0)	3.6	(5.2) 外側：(4.6) 布切：(4.6) 布切	褐色	白色粒子	良
21	83	土師器・坪	北東トレンチ	(13.0)	4.9	(7.0) 外側：ナデ 底部：クロコ状切りの後ヘラケズリ	にぶい褐色	赤色粒子、白色粒子、石英	良

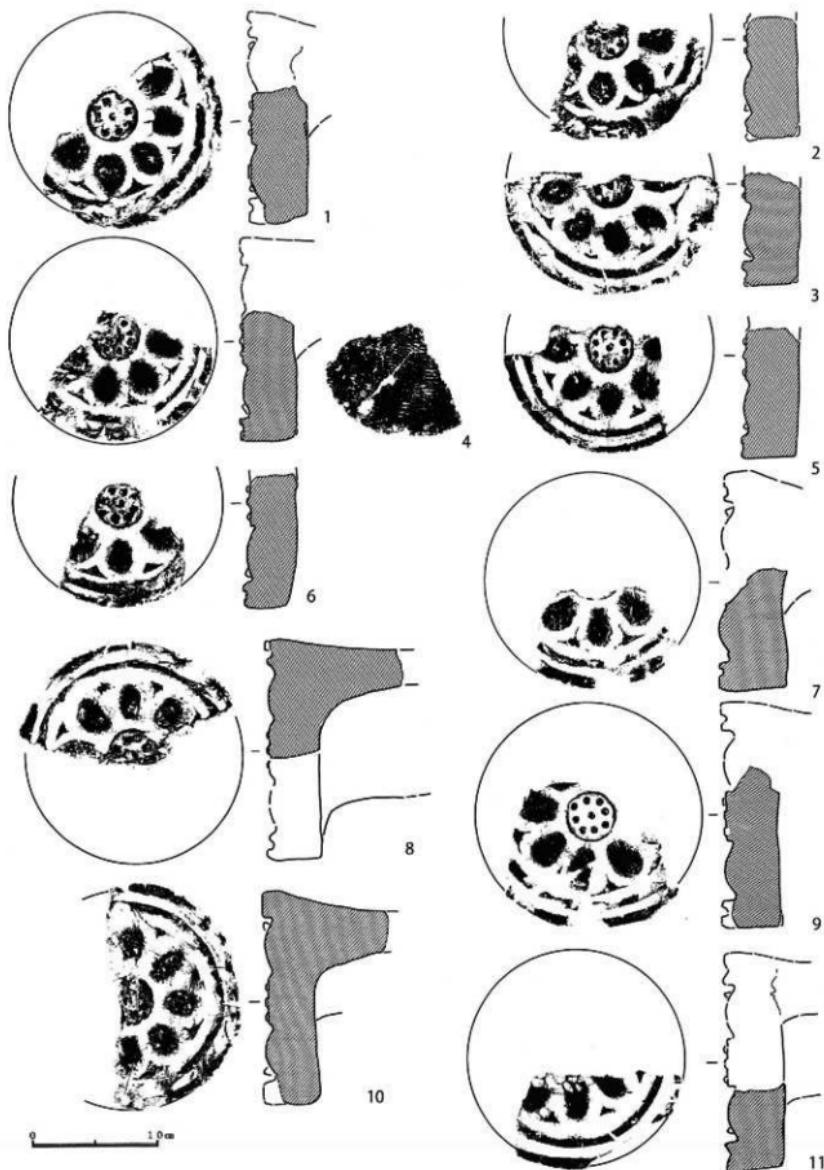
21	84	土耕器・坪	北東園トレンド (12.0)	3.1 (6.7)	外側：ナデ 内側：ナデ 底面：系切り窓	外側：にぶい褐色 内面：淡色	赤色粒子、白内粒子、企型 壁	良	内面にスス付着
21	85	土耕器・坪	北東園トレンド (12.0)	3.0 (6.0)	外側：ナデ 内側：ナデ 底面：系切り窓	外側：淡色 内面：系切り窓	赤色粒子、白内粒子	良	
21	86	土耕器・坪	北東園トレンド (12.4)	3.4 (4.5)	外側：ナデ 内側：ナデ 底面：系切り窓	外側：淡色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白内粒子	良	
21	87	土耕器・坪	北東園トレンド (12.0)	2.3 (5.5)	外側：ナデ 内側：ナデ 底面：系切り窓	外側：にぶい褐色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白内粒子	良	上端部にスス付着
21	88	土耕器・坪	北東園トレンド (12.6)	3.7 (6.2)	外側：ナデ 内側：ナデ 底面：系切り窓	外側：褐色、内面：青 内面：淡色	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	
21	89	土耕器・坪	北東園トレンド (12.8)	2.8 (6.1)	外側：ナデ 底面：系切り窓 底面：系切り窓	外側：褐色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白色粒子、企型 角、石英	良	内面にスス付着
21	90	土耕器・坪	灰トレンチ (10.8)	2.4 (6.0)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：にぶい褐色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、金銀斑	良	底面に墨跡あり
21	91	土耕器・坪	北東トレンチ (11.0)	3.4 (6.0)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：淡色 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子	良	
21	92	土耕器・坪	北東園トレンチ (12.6)	3.1 (6.4)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：淡色、内面：淡色 内面：系切り窓	赤色粒子、余留物	良	内・外側にスス付着
21	93	土耕器・坪	北東園トレンチ (12.8)	3.4 (5.0)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：にぶい褐色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	内・外側にスス付着
21	94	土耕器・坪	北東園トレンチ (12.4)	3.1 (5.0)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：淡色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	内・外側にスス付着
21	95	土耕器・坪	北東園トレンチ (11.0)	3.4 (3.9)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：褐色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	上端部にスス付着
21	96	土耕器・坪	北東トレンチ (12.2)	3.3 (7.0)	外側：系切り窓 底面：系切り窓	外側：褐色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	上端部内にスス付着
21	97	土耕器・坪	北東園トレンチ (12.0)	3.8 (5.9)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：にぶい褐色 内面：淡色	赤色粒子、白色粒子	良	上端部にスス付着
21	98	土耕器・坪	北東園トレンチ (12.4)	3.5 (6.2)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：淡色 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	
21	99	土耕器・坪	北東園トレンチ (11.6)	3.3 (5.0)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：淡色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	
21	100	土耕器・坪	北東園トレンチ (20.4)	-	内面：ナデ	黒色ーにぶい褐色	赤色粒子	良	内・外側にスス付着
22	101	土耕器・坪	北東園トレンチ (13.4)	-	外側：ナデ 内面：ナデ	黒色ーにぶい褐色	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	
22	102	土耕器・坪	北東園トレンチ (13.8)	-	外側：ナデ 内面：ナデ	黒色 内面：ナデ 内側：ナデ	白色粒子、石英	良	
22	103	土耕器・坪	北東園トレンチ (16.6)	-	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：にぶい褐色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	底面内にスス付着
22	104	土耕器・坪	北東園トレンチ (14.0)	-	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：褐色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白色粒子、石英	良	
22	105	土耕器・坪	北東園トレンチ (11.6)	-	外側：ナデ 底面：系切り窓	外側：褐色 内面：ナデ	白色粒子	良	内・外側にスス・タール付着
22	106	土耕器・坪	北東園トレンチ (11.0)	-	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：褐色 内面：ナデ 内側：ナデ	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	上端部にスス付着
22	107	土耕器・坪	北東園トレンチ (13.2)	-	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：褐色 内面：系切り窓	白色粒子、白色粒子	良	内面にスス付着
22	108	土耕器・坪	北東園トレンチ (17.0)	-	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：褐色 内面：系切り窓	赤色粒子、金霞母	良	
22	109	土耕器・坪	北東園トレンチ (13.0)	-	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：淡色 内面：系切り窓	白色粒子、余留物	良	
22	110	土耕器・坪	北東園トレンチ (12.2)	-	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：褐色 内面：系切り窓	白色粒子	良	
22	111	土耕器・坪	北東園トレンチ (—)	(底面)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	白色粒子、余留物	良	内面にスス付着
22	112	土耕器・坪	北東園トレンチ (—)	(底面)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	白色粒子、石英	良	外側は表面が黒い
22	113	土耕器・坪	北東園トレンチ (—)	(底面)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	白色粒子、余留物	良	
22	114	土耕器・坪	北東園トレンチ (—)	(底面)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：にぶい褐色 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	
22	115	土耕器・坪	北東園トレンチ (—)	(底面)	外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	内面にスス付着
22	116	土耕器・坪	北東園トレンチ (—)	(底面)	外側：ナデ 底面：系切り窓 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	内面にスス付着
22	117	土耕器・坪	北東園トレンチ (—)	-	6.4 底面：系切り窓	外側：にぶい褐色 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	内面にスス付着
22	118	土耕器・坪	中央トレンチ (—)	-	(6.0) 外側：ナデ 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	
22	119	土耕器・坪	北東園トレンチ (—)	-	(5.8) 外側：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子	良	消耗している
22	120	土耕器・坪	北東トレンチ (—)	-	6.0 外側：ナデ 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	
22	121	土耕器・坪	北東トレンチ (—)	-	4.0 外側：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	消耗している
22	122	土耕器・坪	北東園トレンチ (—)	-	(5.0) 外側：ナデ 内面：ナデ 底面：系切り窓	外側：にぶい褐色 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子	良	
22	123	土耕器・高台付	北東トレンチ (—)	-	6.0 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	消耗している
22	124	土耕器・高台付	北東トレンチ (—)	-	(7.5) 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	消耗している
22	125	土耕器・高台付	北東園トレンチ (—)	-	(5.5) 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	
22	126	土耕器・高台付	北東トレンチ (—)	-	8.0 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	消耗している
22	127	土耕器・高台付	北東トレンチ (—)	-	6.5 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子	良	消耗している
22	128	土耕器・高台付	北東園トレンチ (—)	-	(6.8) 底面：ナデ 内面：ナデ	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	高台付の影響
22	129	土耕器・高台付	北東トレンチ (—)	-	5.4 底面：ナデ 貼合窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	
23	130	土耕器・高台付	北東園トレンチ (—)	-	(6.0) 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子	良	
23	131	土耕器・高台付	北東園トレンチ (—)	-	(5.8) 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子	良	
23	132	土耕器・高台付	北東園トレンチ (—)	-	6.8 底面：系切り窓	外側：系切り窓 内面：系切り窓	赤色粒子、白色粒子、企型 角	良	

23	133	土鍋部・古台付近	南北向レンジ	-	(6.4)	計付高台	褐色～黒色	白い粒子、石英	良		
23	134	土鍋部・高台付近	北東向レンジ	-	-	外側：ナメ 内面：ナメ	褐色	赤色粒子、石英、金星	良		
23	135	土鍋部・外	北東向レンジ	(8.6)	3.3	(4.0)	褐色	赤色粒子、白色粒子、金星	良	磨耗が激しい	
23	136	上端部・外	北東向レンジ	-	-	(4.0)	にぶい褐色	赤色粒子、白色粒子	良	内面にスス付着	
23	137	土鍋部・外	北東向レンジ	-	-	(4.0)	にぶい褐色	赤色粒子、白色粒子	良	磨耗が激しい	
23	138	上端部・外	北東向レンジ	-	-	(5.4)	内面：ナメ 延縫：赤切り西 外面：粉白	赤色粒子、白色粒子	中等		
23	139	上端部・柱状露台環	北東向レンジ	-	-	(4.6)	褐色	赤色粒子、白色粒子	不良		
23	140	土鍋部・外	南北向	-	-	(7.6)	底面：赤切り灰	灰色	赤色粒子	良好	
23	141	土鍋部・外	南北向	-	-	(9.0)	底面：赤切り灰	褐色	白色粒子	良	墨書き・中門・立
23	142	土鍋部・外	東向	-	-	-	外側：ナメ 内面：ナメ	灰色	白色粒子	良好	
23	143	土鍋部・外	中央・東向	(19.4)	-	-	外側：ナメ 内面：ナメ	灰褐色	白色粒子	良好	
23	144	土鍋部・外	正面	-	-	-	外側：ナメ 内面：ナメ	灰褐色	白色粒子	良好	
23	145	土鍋部・外	東	(11.0)	-	-	外側：ナメ	灰色	白色粒子	良好	
23	146	土鍋部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き	灰色	赤色粒子	良	
23	147	南向部・外	北東向	-	-	-	内面：黒色	黑色	白色粒子	外側に黒が付着	
23	148	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足	灰色	白色粒子	良好	
23	149	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き	灰色	白色粒子	良好	
23	150	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：金銀鉢	灰色	白色粒子	良好	
23	151	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足	灰色	白色粒子	良好	
23	152	南向部・外	北東向	-	-	-	-	灰色	白色粒子	良好	
23	153	南向部・外	中央	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足 灰褐色	灰色	白色粒子	良好	
23	154	南向部・外	中央	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足 灰褐色	灰色	白色粒子	良好	
23	155	南向部・外	中央	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足 灰褐色	灰色	白色粒子	良好	
23	156	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足 灰褐色	灰色	白色粒子	良好	
23	157	南向部・外	中央	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足 灰褐色	灰色	白色粒子	良好	
23	158	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足	灰色	白色粒子	良好	外側に黒が付着
24	159	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足	灰色	白色粒子	良好	
24	160	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足	灰色	白色粒子	良好	
24	161	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き	灰色	白色粒子	良好	内・外側に黒がかかる
24	162	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足	灰色	白色粒子	良好	
24	163	南向部・外	東	-	-	-	外側：叩き	灰色	白色粒子	良好	
24	164	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足	灰色	白色粒子	良好	
24	165	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：あて具足	灰色	白色粒子	良好	
24	166	南向部・外	東	-	-	-	外側：叩き	灰色	白色粒子	良好	
24	167	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き	灰色	白色粒子	良好	外側がやや黒経している
24	168	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き	灰色	白色粒子	良好	
24	169	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き	灰色	白色粒子	良好	
24	170	南向部・外	東	-	-	-	外側：叩き	灰色	白色粒子	良好	
24	171	南向部・外	北東向	-	-	-	外側：叩き 内面：ナメ	灰褐色	白色粒子	良好	
24	172	南向部・外	北東向	(0.2.0)	-	-	外側：叩き 内面：ナメ	灰褐色	白色粒子	良好	
24	173	南向部・外	中央	(0.5.8)	-	-	外側：叩き 内面：ナメ	灰褐色	白色粒子	良好	
24	174	南向部・外	北東向	(0.7.6)	-	-	外側：叩き 内面：ナメ	灰褐色	白色粒子	良好	
24	175	南向部・外	北東向	(0.7.8)	-	-	外側：叩き 内面：ナメ	灰褐色	白色粒子	良好	
24	176	南向部・外	北東向	-	-	(7.8)	外側：ナメ 内面：ナメ	灰褐色	白色粒子	良好	
24	177	南向部・外	中央	(0.2.0)	-	-	外側：ナメ 内面：ナメ	灰褐色	白色粒子	良好	
24	178	灰釉陶器・長筒付	北東向	-	-	-	外側：ナメ 内面：ナメ	灰褐色	良石	良好	
24	179	灰釉陶器・長筒付	北東向	-	-	(8.0)	外側：ナメ 内面：ナメ	灰褐色	良石	良好	

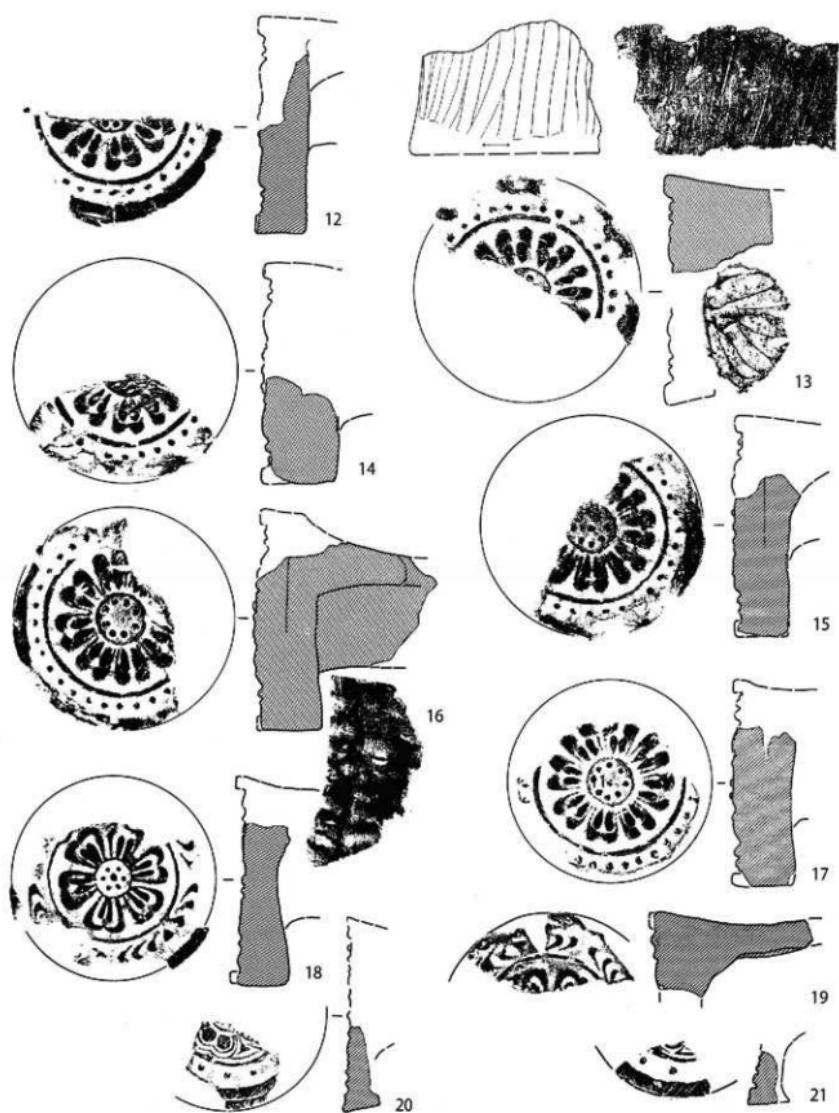
第7表 土製品観察表

試験番号	構造	断面	出土位置	法面 (cm)	実積	色調	鉄土	焼成	備考	
25	180	泥芯・等無	南北向レンジ	3.0	4.3	3.7	暗褐色	砂粒	良	
25	181	配渠	南北向レンジ	5.0	6.0	5.7	茶褐色	白色粒子	良	磨耗が激しい
25	182	泥芯	南北向レンジ	5.5	4.9	3.3	褐色	白色粒子	やや良	
25	183	不焼土製品	南北向レンジ	7.7	4.8	3.7	茶褐色	白色粒子、金星	良	
25	184	小形土製品	中央	6.8	4.2	2.1	ナメ	にぶい褐色	良	

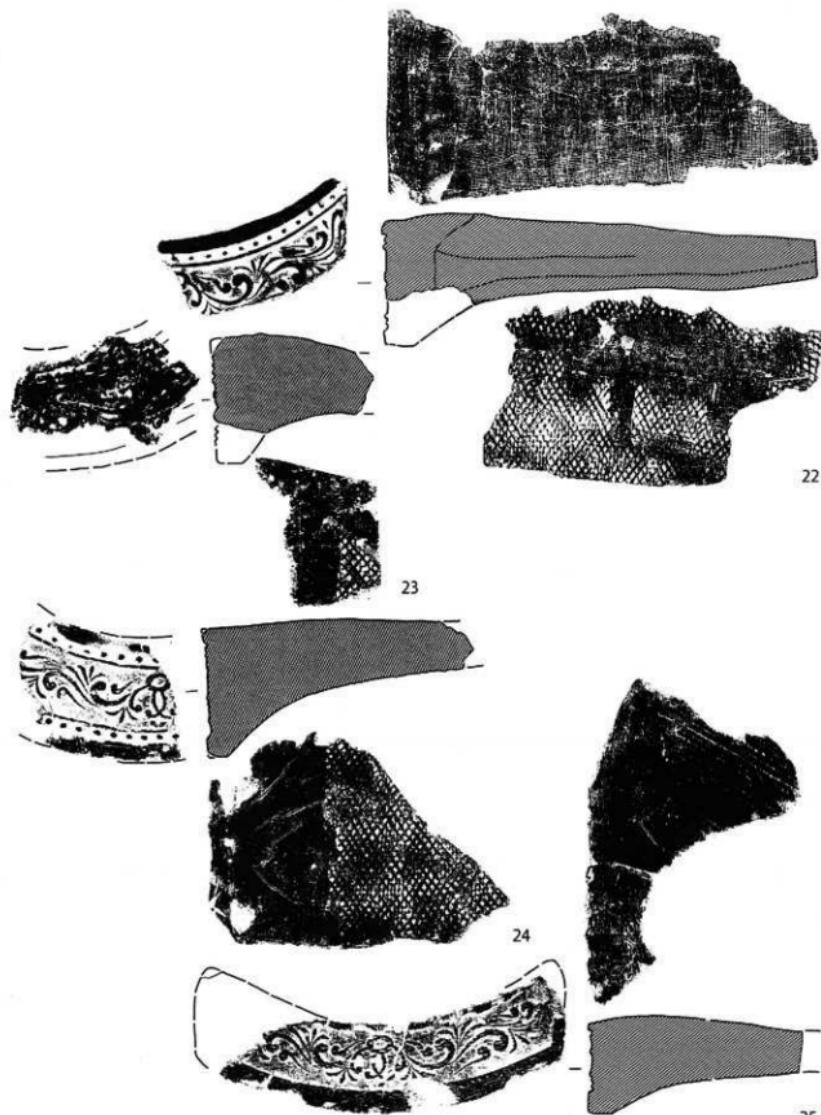
※土製品の法面は現存



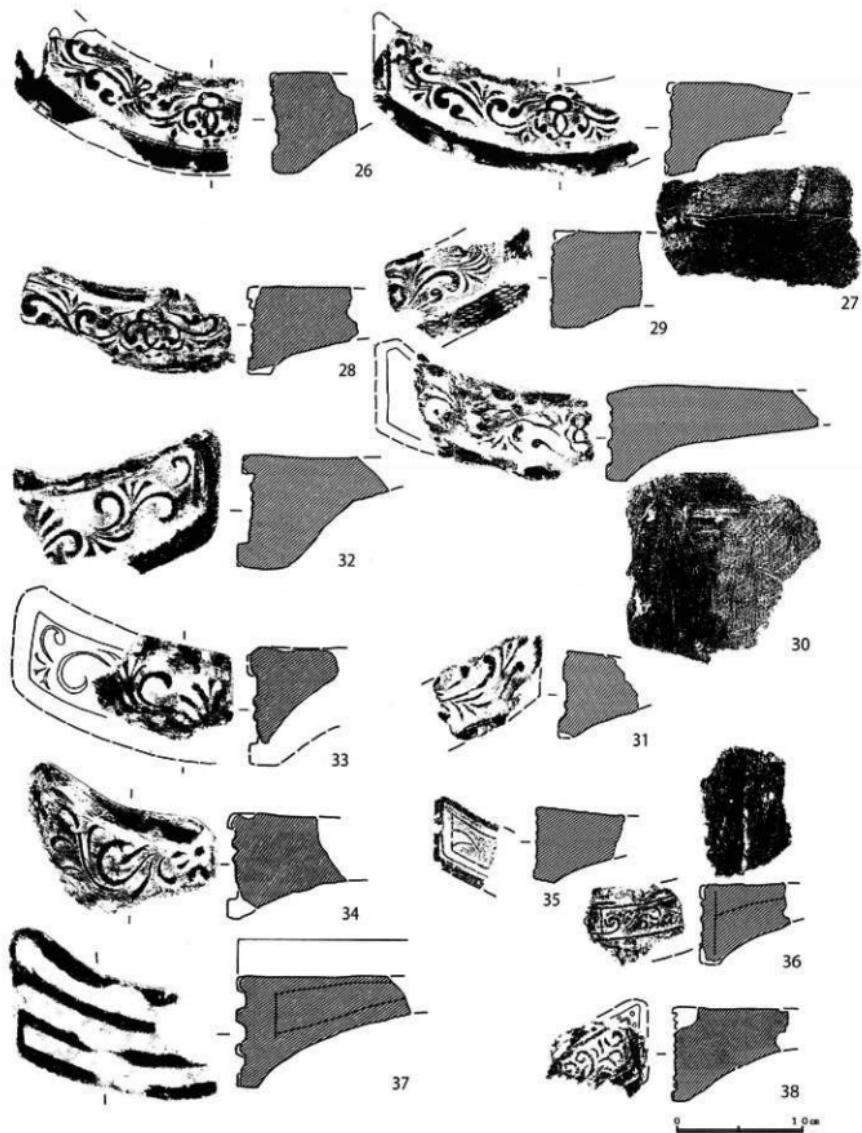
第12図 軒丸瓦実測図(1)



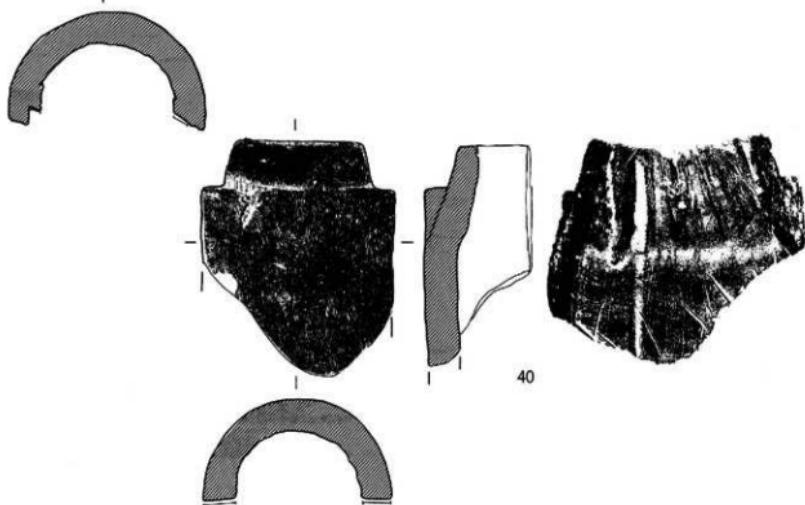
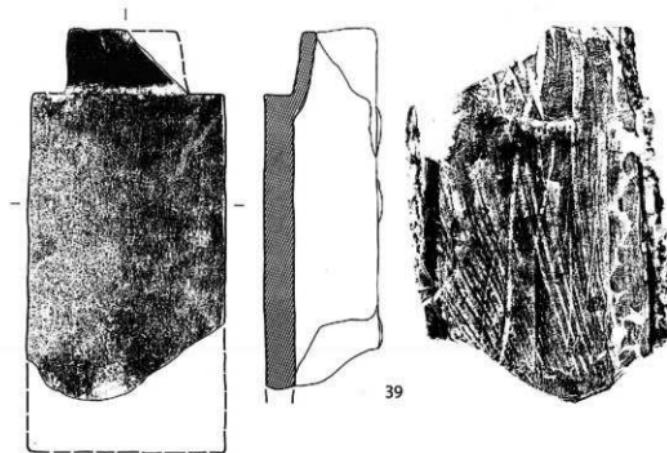
第13図 軒丸瓦実測図(2)



第14図 軒平瓦実測図(1)

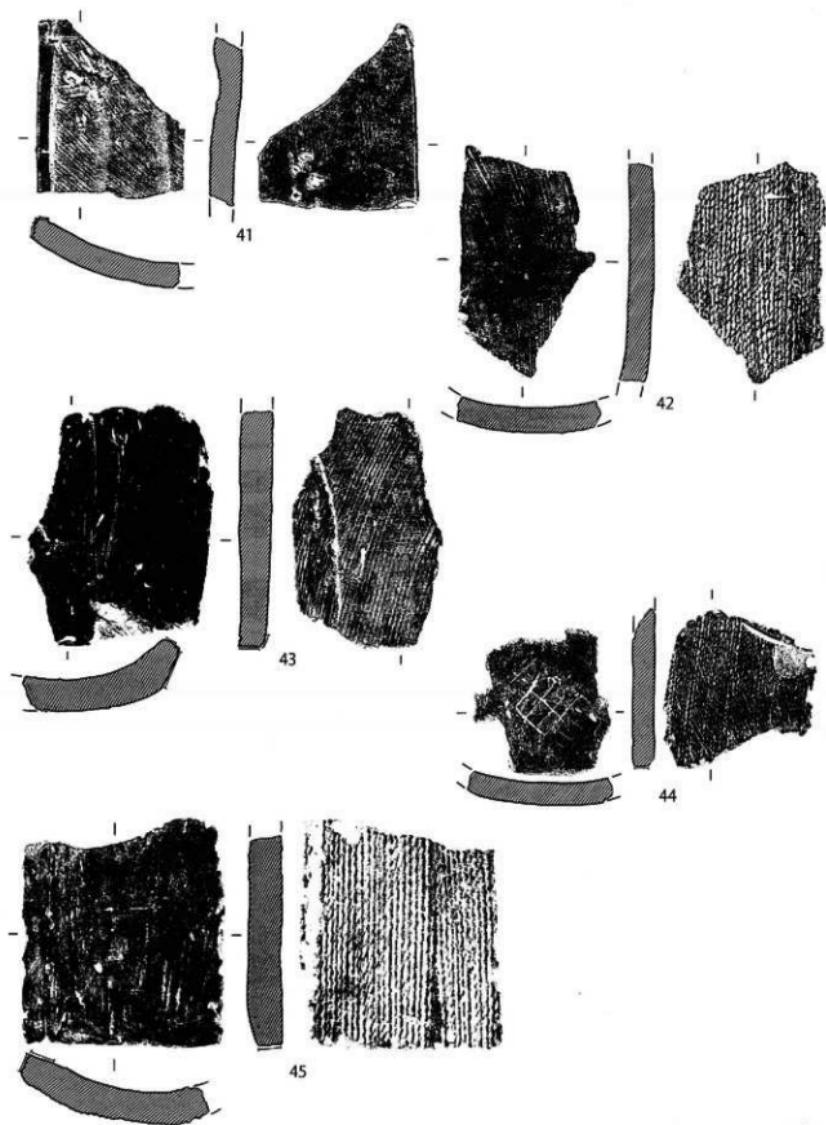


第15図 軒平瓦実測図(2)



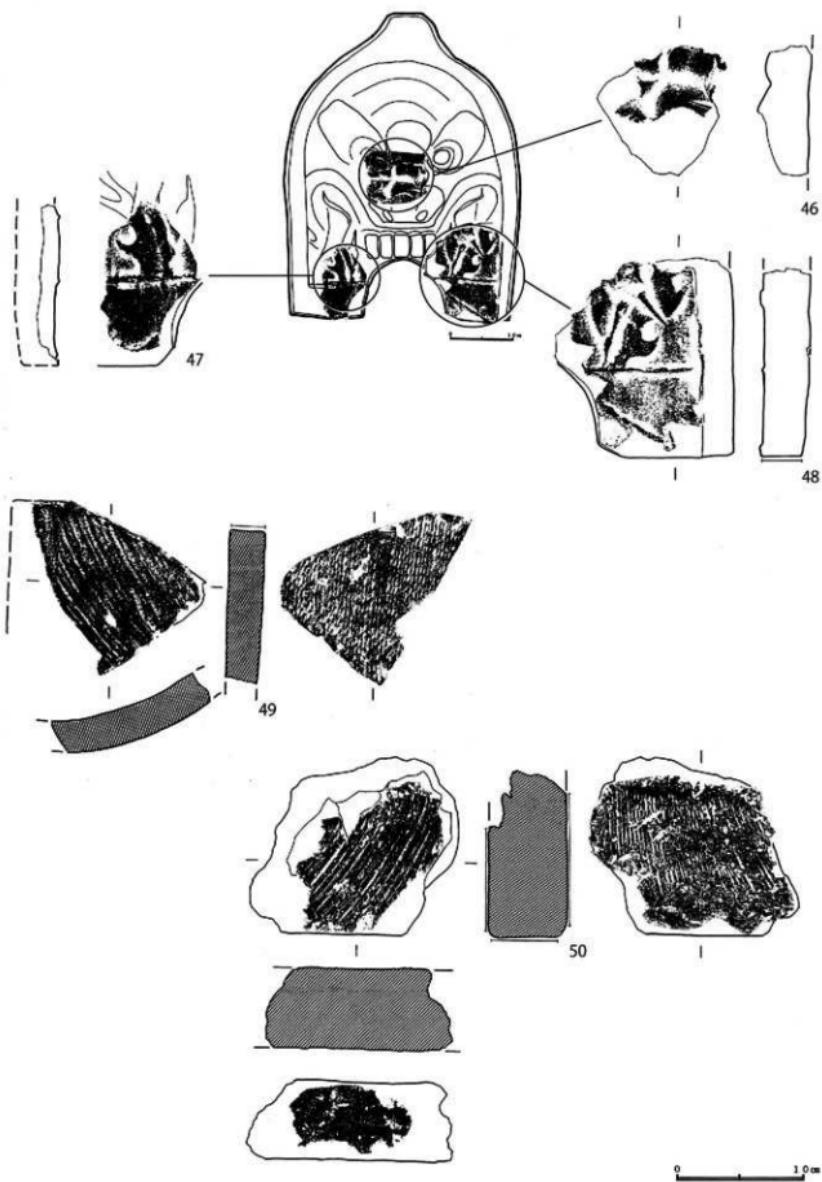
0 10cm

第16図 丸瓦実測図

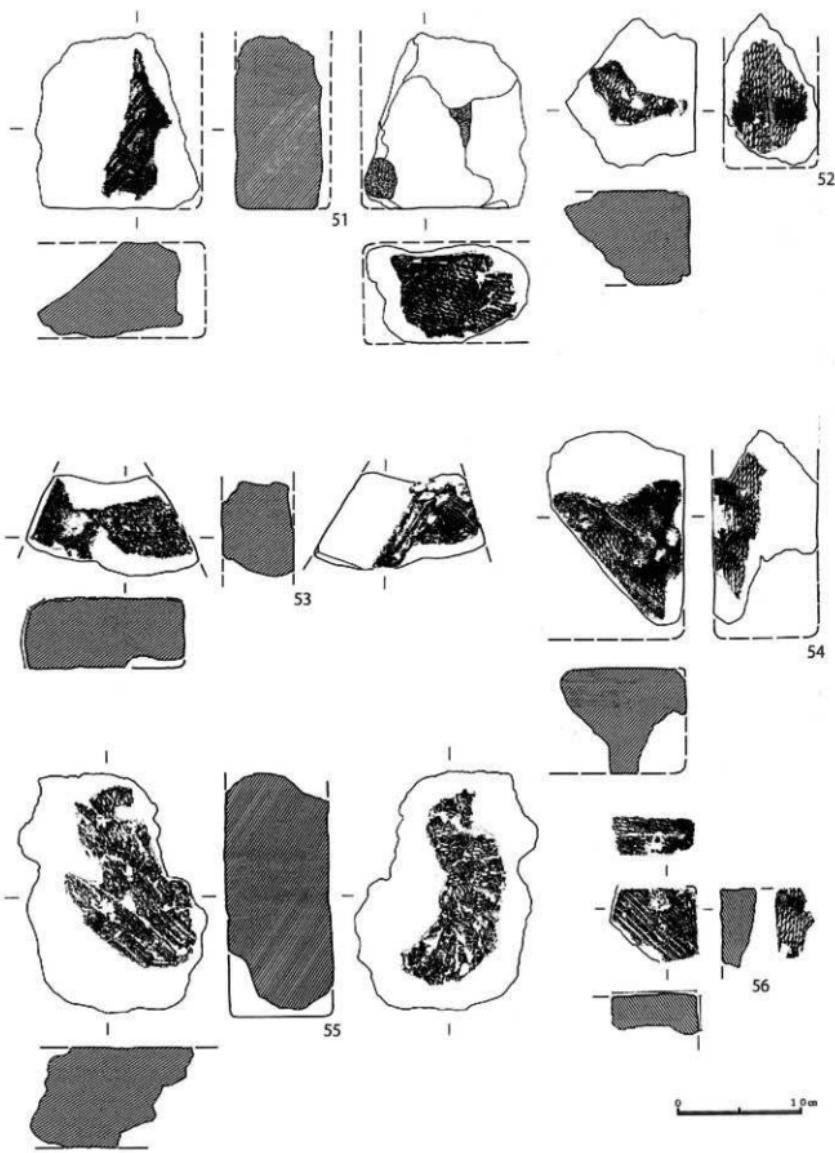


0 1.0m

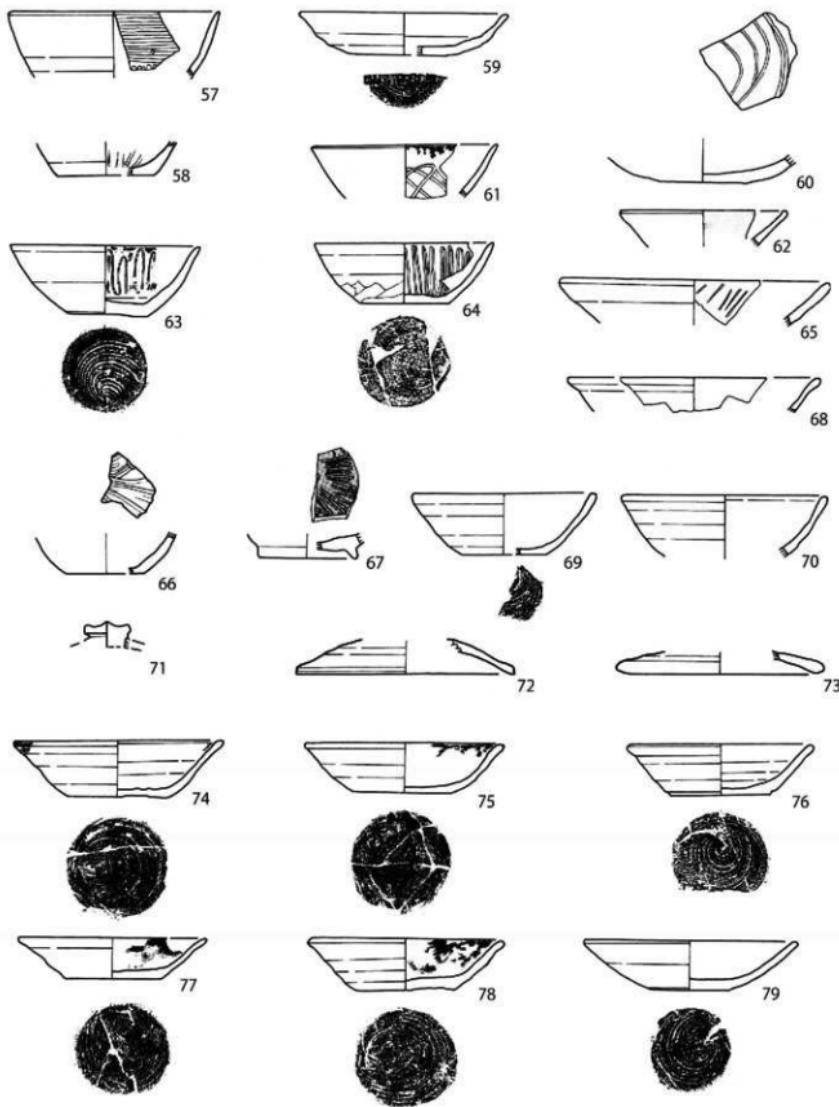
第17図 平瓦実測図



第18図 道具瓦・埴実測図

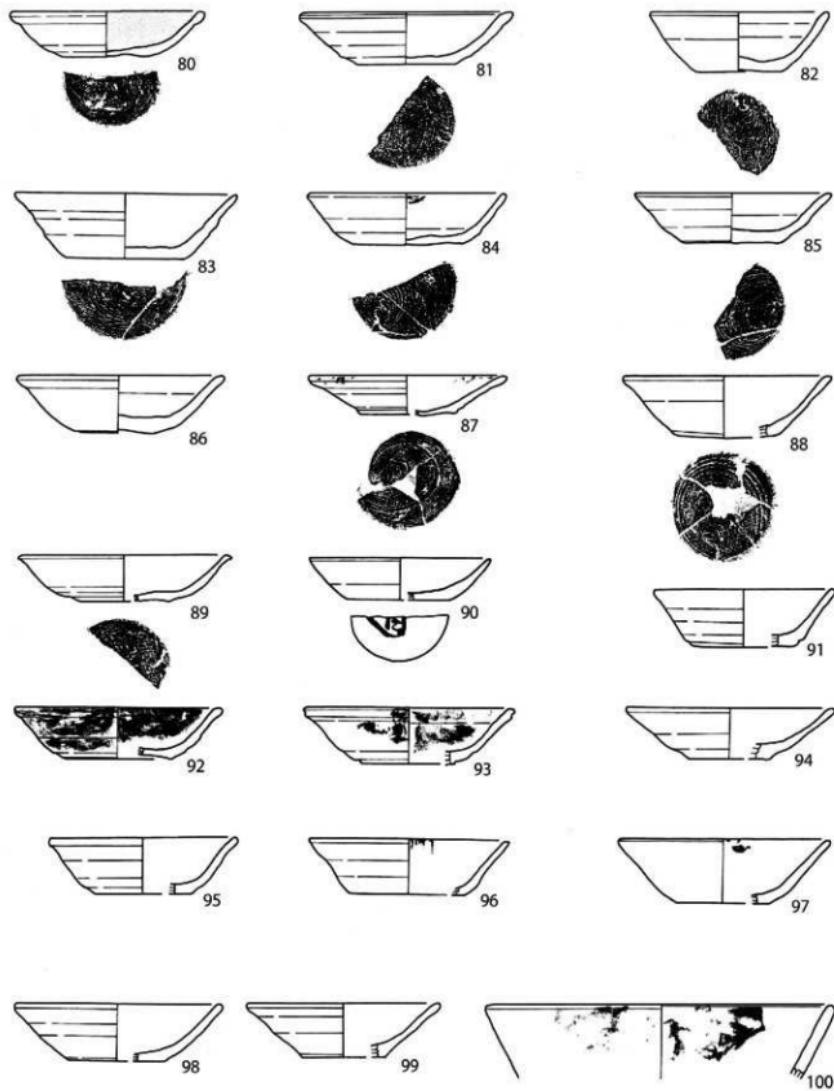


第19図 墓実測図

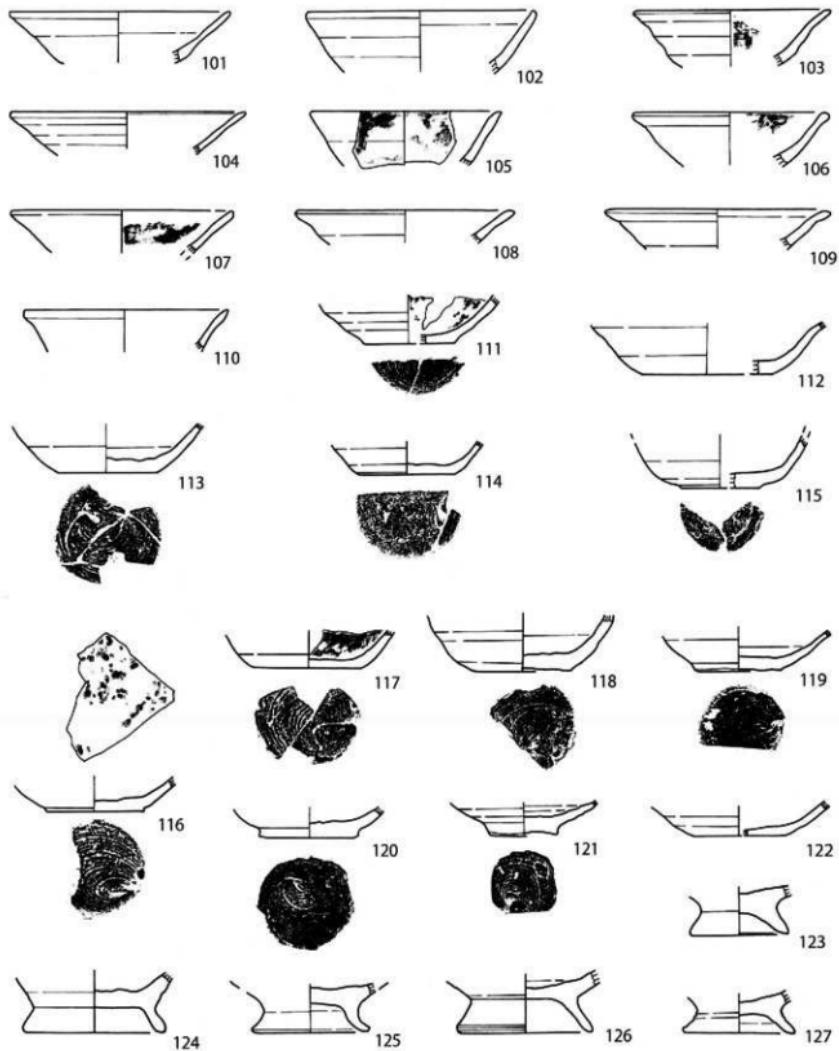


第20図 出土土器実測図(1)

0 10 cm

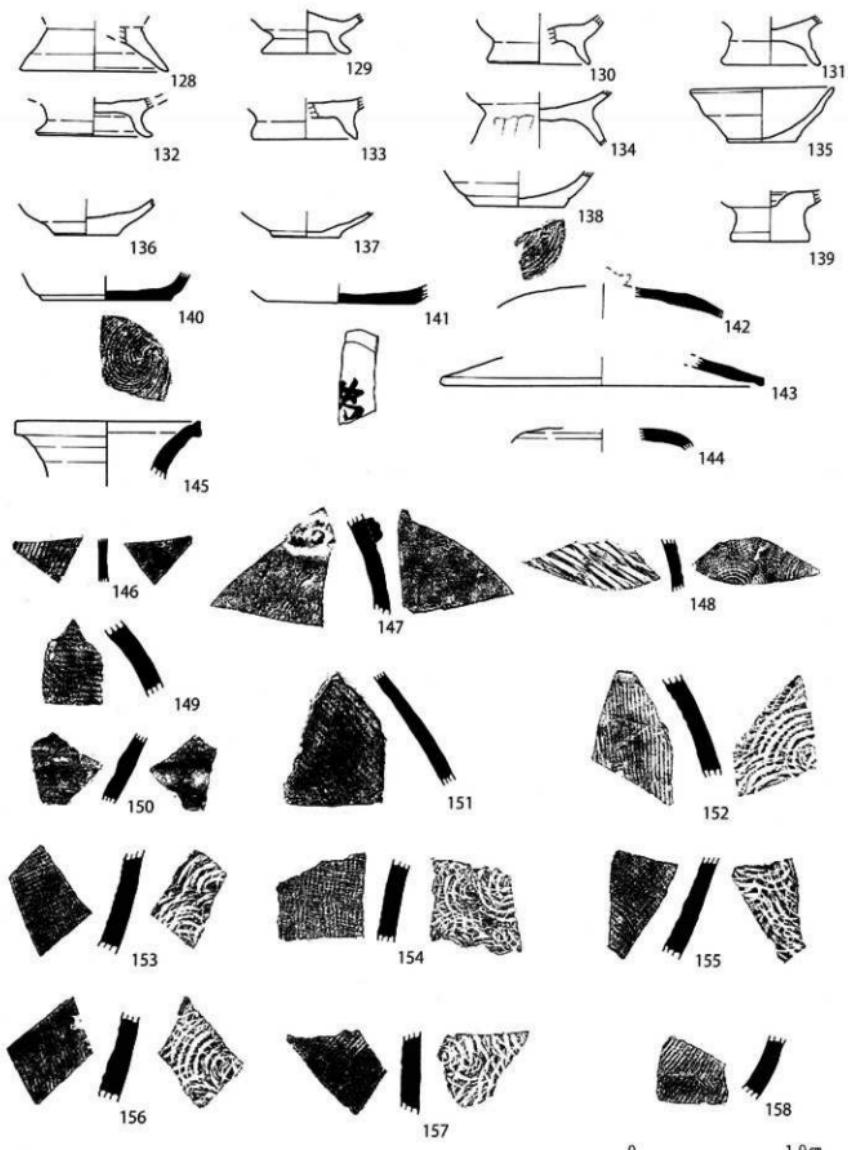


第21図 出土土器実測図(2)

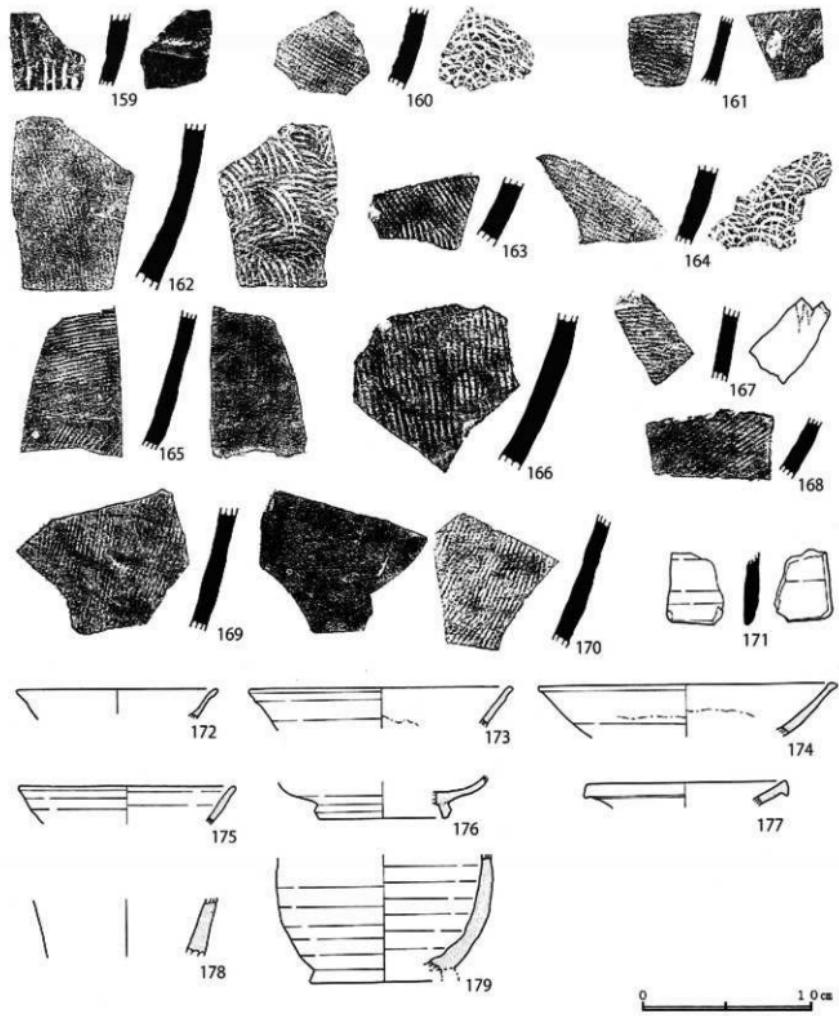


0 1 10 cm

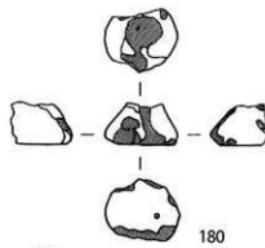
第22図 出土土器実測図(3)



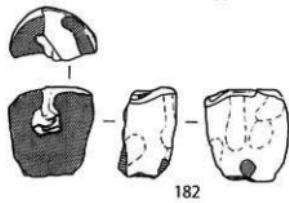
第23図 出土土器実測図(4)



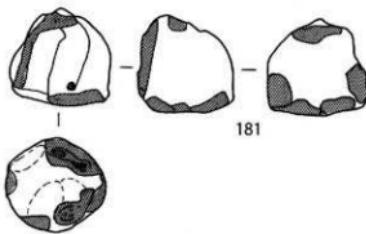
第24図 出土土器実測図(5)



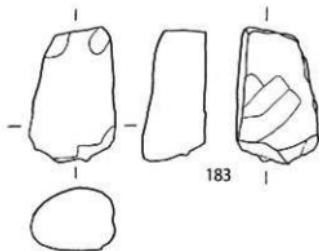
180



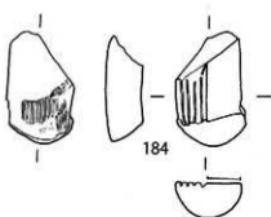
182



181



183



184

0 10 cm

第25図 土製品実測図

写真図版 1



金堂正面階段前石敷（南から）



金堂正面階段前石敷（北から）



金堂跡南西トレンチ調査風景



金堂南西石敷（北東から）



壊出土状況



金堂東トレンチ（北）検出状況



瓦出土状況

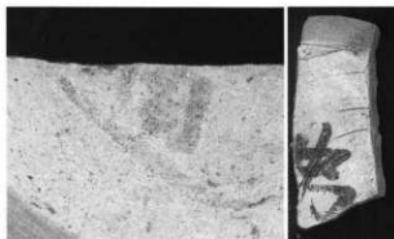


石製露盤

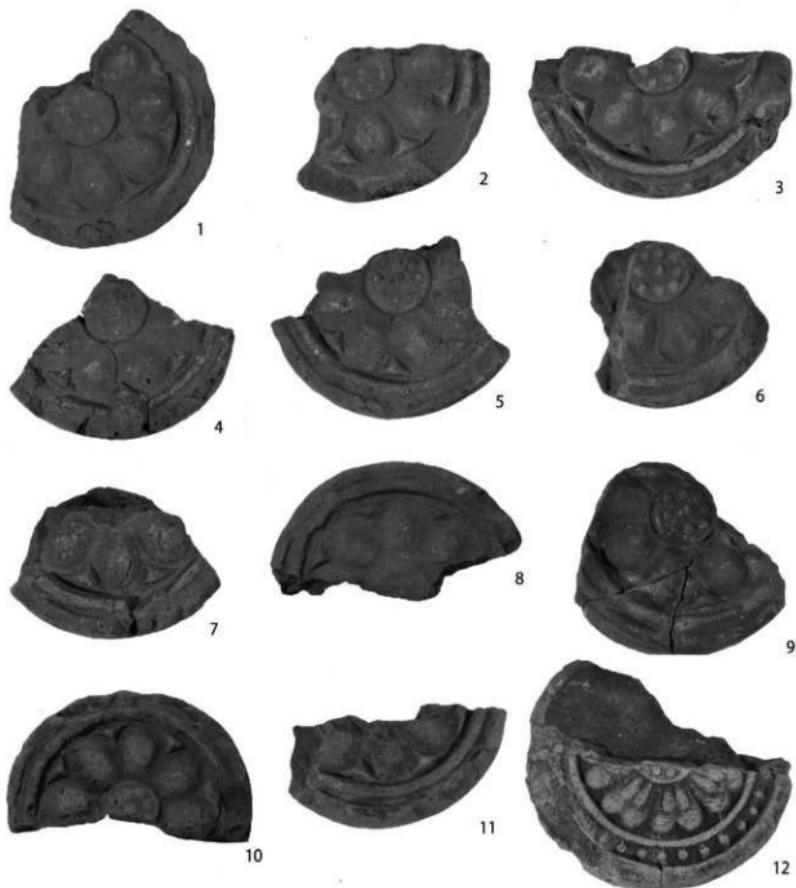
写真図版 2



薬師經石等



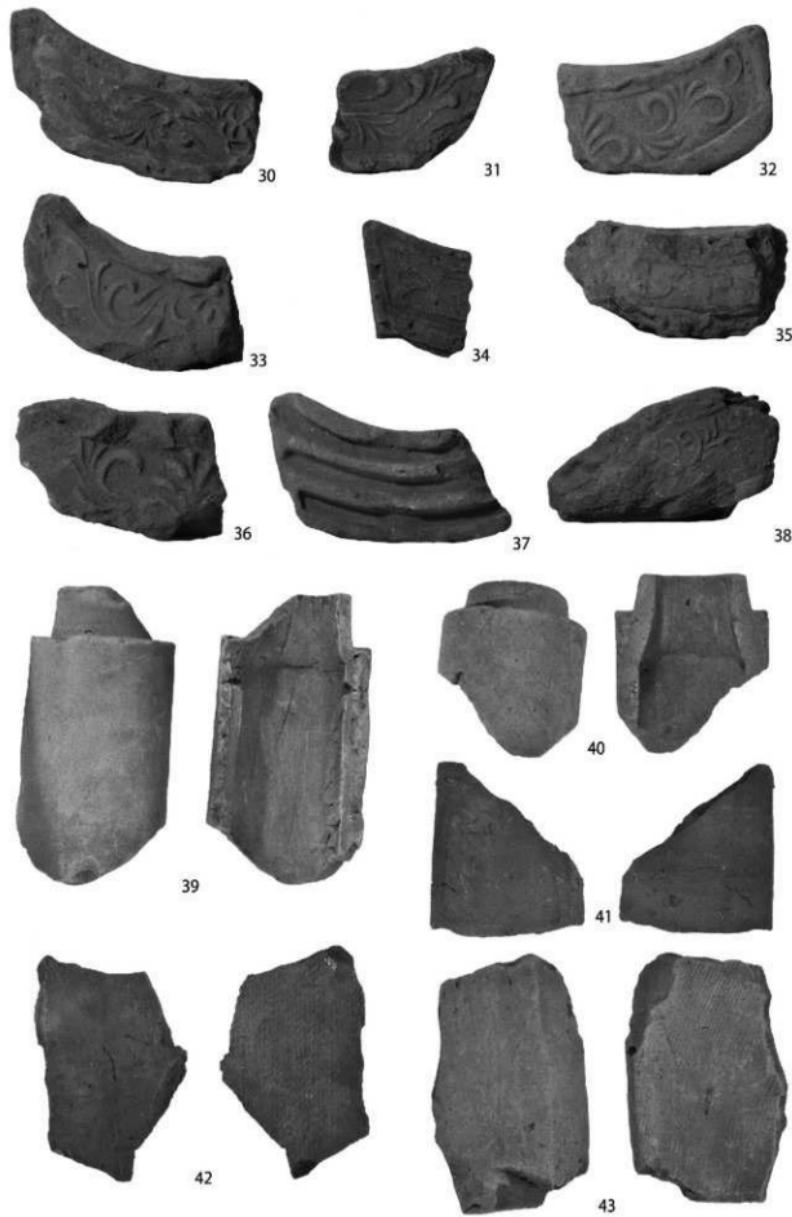
墨書き土器赤外線写真



写真図版 3



写真図版 4



写真図版 5



44



45



46



47



48



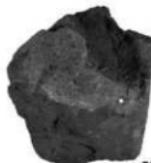
49



50



51



52



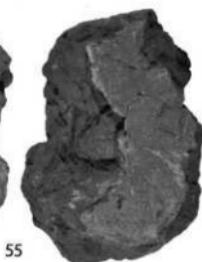
53



54

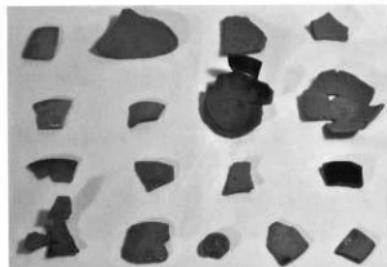


55

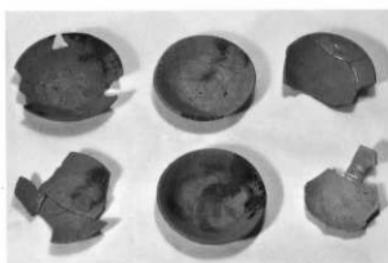


56

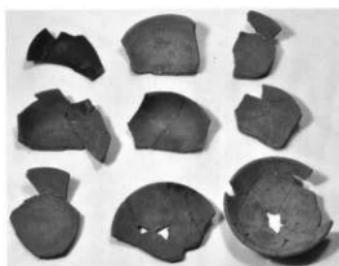
写真図版 6



出土土器 57～73



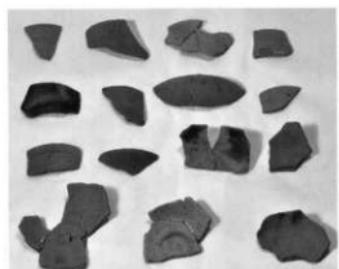
出土土器 74～79



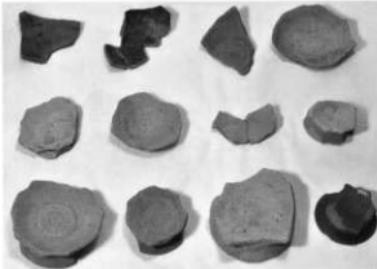
出土土器 80～88



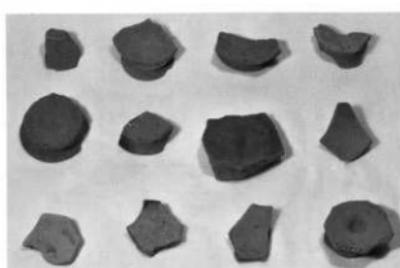
出土土器 89～100



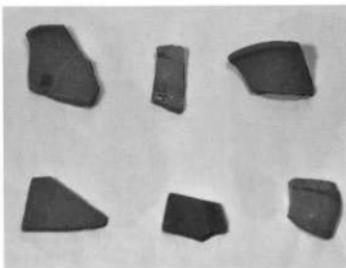
出土土器 101～115



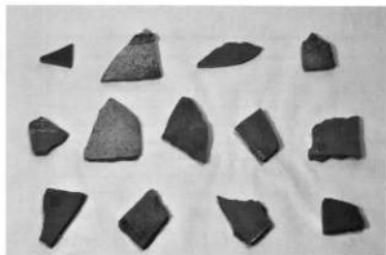
出土土器 116～127



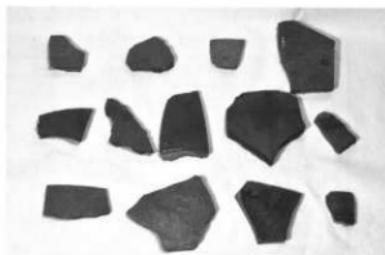
出土土器 128～139



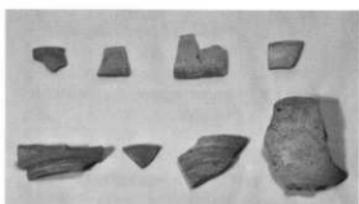
出土土器 140～145（須恵器）



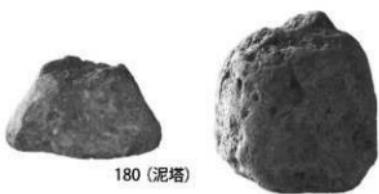
出土土器 146～158（須恵器）



出土土器 159～171（須恵器）



出土土器 172～179（灰釉陶器）



180（泥塔）

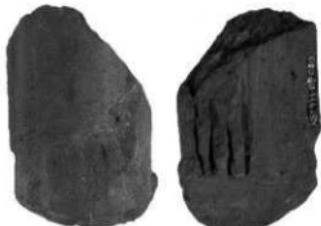
181（泥塔）



182（泥塔）



183（不明土製品）



184（不明土製品）

報告書抄録

ふりがな	くにじいせきかいかくぶんじあと						
書名	国指定史跡甲斐国分寺跡						
副書名	金堂跡確認調査の概要報告書						
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 22 集						
著者名	大木丈夫						
編集機関	笛吹市教育委員会						
所在地	〒 406-0031 山梨県笛吹市石和町山部 809-1 Tel 055-261 3342						
発行年月日	2012 年 3 月 30 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
かいこうぶんじあと 甲斐國分寺跡	山梨県笛吹市一宮町山部 分 425-1 外	一宮 19201	35° 38'	138° 41'	2008.12.8 ~	540	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
甲斐國分寺跡	守院跡	奈良時代・平安時代・中世	地盤石 金堂基礎 石敷 礎石 瓦覆り 回廊基礎	瓦 上部漆器 須恵器 上部質土器 平州金	中安國分寺跡の金堂基礎は東西約 41 ~ 42m、南北 22.6m あり、内部は金堂側面中央部に接続する。金堂の周囲には瓦落ち溝ではなく、石敷で囲まれている。		
甲斐國分寺跡は、昭和 45 年に山梨県教育委員会によって初めて発掘調査された。その後、一宮町教育委員会により史跡確認調査が実施され、平成 2 年に発掘調査報告書が刊行されている。この砦跡確認調査は「史跡甲斐國分寺跡・甲斐國分尼寺跡保存管理計画」に基づき行われ、さらに現在の國分寺の移転及び建築の墓地移転を検討するとしていた。墓地移転等と史跡指定範囲の土地買取が進んだことから、史跡整備のためのデータ収集の調査を 1 年計画で行うこととなり、手始めに金堂跡の解明を目指して調査した。							
結果、南北の地盤石の列を確認できたので、金堂基礎南北は 22.6m あることが判明した。東西については基盤の残存状況から約 41 ~ 42m と推測され、相当大規模な金堂が想定される。階段幅は 10.8m あり、中央の柱間三間に対応すると思われる。当寺は、一般的の大官大寺式という回廊が会堂を取り付いている伽藍配置を探っており、会堂は金堂側面中央部に取り付いていることも判明した。金堂前面と背面には石敷が敷かれており、花崗岩に見せることと瓦落溝をかねていたと考えられる。出土遺物は 8 世紀中頃 ~ 12 世紀代に位置づけられる土師器などが出土している。							
今回の調査でも何点か課題が残されている。最大のものは、柱の配慮が判断できなかつたことである。廊柱は 3 つ確認できたが、元の位置には無かった。また、石敷は南北 6m は確認したが、石敷がどのくらいの範囲までひろがっていたのかも課題である。							

笛吹市文化財調査報告書 第 22 集 国指定史跡 甲斐國分寺跡 - 金堂跡確認調査の概要報告 -	
2012 年 3 月 16 日 印刷 2012 年 3 月 30 日 発行	
発 行 者 〒 406-0031 山梨県笛吹市石和町山部 809-1 笛吹市教育委員会 印 刷 社 稲村印刷社	

A National Designation Landmark
Kai-Kokubunji Site

A Summary Report of the Archaeological Survey at
the KONDO(Main Hall) of the Yamanashi Provincial
Monastery,2008-2009

March,2012
Fuefuki City Board of Education